

2/8

訂正
增補

須磨誌



須磨誌序

上原君所著須磨誌一卷借覽

數日未卒業而返焉余買船往

還浪花神戶者不知其幾回而

青松白沙于波光艷激之

間未能縱觀其風景也距今三

年發神戶將赴岡山亦以在瀛



車中唯看松飛沙奔而已猶未
卒業而返本誌也

明治二十六年七月

讚岐 赤松 渡撰

目錄

須磨の位置	須磨の解	須磨の風景
須磨の人家	須磨の舊家	風土氣候
須磨の繁榮	須磨の旅館	海水浴
療病院	須磨の雜詠	行平伐住の事蹟
葉 帚	行平衣懸松	行平月見松
遠山松	因幡山	松風村雨堂
因幡藥師	前田氏	長田社
菅之井	賴政藥師	重衡腰掛松
上野山福祥寺	青葉笛	辨慶の鐘
若木櫻	嫩木櫻制札	上 野
後の山	馬 塚	網敷天神社

天神松	現光寺	似雲風月庵の跡
芭蕉翁句碑	須磨の關屋跡	須磨の月
詩歌(關及び月)	須磨の隱江	千森川
磯馴松	村上帝社	關守稻荷
蛇窟	寐覺庵	八本松
一の谷	内裏蹟	逆落し
源平躑躅	鉄枌山	鐘懸松
鷓越	熊谷扇松	勢揃の松
古跡塚	鉢伏山	熊谷平山一二の懸
敦盛塔	敦盛蕎麥	泉水井
界川	龜井日和	須磨琴
須磨簾	藻鹽磯馴味噌	湖雜炊

須磨燒	吟谷彫	大師染
須磨以東	桂尾山勝福寺	神撫山禪昌寺
聖靈權現	盛俊墓	長田神社
蓮の池	明石	人丸神社
須磨以西	舞子の濱	
盲杖櫻	八房梅	

凡例

一引用書之源氏物語伊勢物語平家物語源平盛衰記太平記延喜式日本紀三代實錄帝王正統錄東鑑須磨記准后親房記和名抄八雲御抄花鳥餘情色葉抄我峰集勝地吐懷篇拾芥抄日本總國風土記播磨風土記地名字音轉用例承應四年記所歷日記須磨名所記千種日記本朝俗諺志今按名蹟考西遊日記名所便覽攝津微書遊方名所畧攝陽群談名所方角抄遊齋勝記須磨比枝折攝西奇遊談万葉古今續古今夫木調夏六帖玉葉金葉千載新古今新千載續後拾遺新後拾遺愚草群書類從西行撰集抄俳諧古今抄句撰後拾遺鹿島紀行名所八休芭蕉翁一代集日本名所吟詠集皇國名家絕句類纂扶桑名所詩集古今日本名家詩鈔皇朝精華集近古詩鈔日本詠史百律皇朝絕句類撰山水奇觀漫遊詩草星巖集山陽詩鈔琴平詩鈔玉川陰社小稿明治百二十家絕句攝津志近世時人傳諸國里人談攝津名所圖會播州名所巡覽圖會須磨の栞須磨の友兵庫縣地誌歴史考播磨名所圖繪須磨名所編案內京華要誌直井元介手記其他新聞雜誌なりとす然れども尙ほ遺漏尠からざるを知らず書中誤るを保せず願くは大方の教示を得て他日改版を期し其誤謬を正し遺漏を補はむとす

一書中記する處の引用書及む詩歌俳句之時の古今を問はず散見するかまゝに記しるものあり

一書中鶉越の一項を加へ其他須磨以外の名所古跡を載せたるは歴史に關係順路の便より編入し

たるものにて猶ほ攝津名所圖會に播州の名所を記し播州名所巡覽圖會に攝津に古跡を記せるの如し

一始め此書を編纂するに際し西須磨村直井元左衛門氏専ら奔走の勞漫とられ今再版に臨み直井元介井上雅の兩氏助力を與へらる又重野安釋杉谷正隆の二氏は本誌に關して編者か發したる質問の解答を與へられ何禮之氏と高吟十二首橋本海關氏と八首瀬川露城氏と俳諧十句を示され何多仁子は「須磨に友」鶴崎平三郎氏と「須磨療養地」ある貴著各一卷を寄せらる茲に附記して其に厚志を謝す

明治二十九年五月

編者 識

須磨誌

上原勇太編纂

須磨の位置

須磨は兵庫縣攝津國武庫郡（須磨ハ八部郡ニ屬セ）本年四月武庫郡原八部ノ三郡ヲ廢シ武庫郡トシテにあり東は大手野田村ニ接シ西は播州境ニ接シ南はなへて青海原ニシテ北は鉢伏鐵柵青谷の山々横たはり其の大手に接する方々東須磨と呼び壘屋ニ境する方域西須磨と云ふは經百三十四度十分北緯三十四度四十分ニ東鑑を按するに

播磨國有ニ瓊瑤明石之勝地

攝陽群談にはこの記事を解いて

須磨は攝津と云ふとも須磨明石と續く名所歟以て播磨の國に瓊瑤明石に勝地ありと一るせしなり

と云へり古書に徴するに

延喜式 攝津國驛草野須磨各十三疋云々
千種日記 攝磨と攝津國の境川あり尙過て敦盛乃石塔あり
顯昭阿闍梨 古今集の「わくふはに云々の前」に註し此集にもいへる如く須磨は攝津國にあり然るを或る人須磨は播磨に在といへりされはにや播磨瀛須磨の關など多く人讀めし僻事なり攝津國播磨境に關はあれと須磨と攝津の方なりされは播磨路やとつゝくへしと先達と申侍し
色葉抄 攝津國と播磨の境に垂水牧と云所遊方名所略 一谷烏崎一里烏崎攝州播州界也
名所方角抄 須磨の關屋といふは今は播磨路と見えたり
今に關屋跡と唱ふる地を以て顯昭の攝播代境に關ありと云へる記事を見る時は古へより須

磨と稱せし西須磨は大部は播州に属せとも關屋の項に記せし如く昔より關屋の位置に二説ありて一は今關屋跡と稱する地を云ひ一と鐵柵山の麓を云へり顯昭はこの鉄柵の麓の方を信じてかくと云ひしものなり名所方角抄の記事も顯昭と同じく西の方を關屋跡と信せしなれ共よく地理を知らざるの故にかく誤りしものなれ然らざれば今より二百年前より西須磨の全部は播州に属せしものとなるへし其の他播磨風土記日本總國風土記を搜索せしも須磨の舊播州に属せる由見えざるは攝陽群談の東鑑の解真にして古へよと攝津の須磨なること明けし播州名所巡覽圖會に

矢田郡郡の舊播州の内にて須磨は明石郡に属せり

と載せられたるは延喜式よりよるとはいへざるはあらず播磨瀧須磨の關など讀める和歌ある其上須磨の明石郡と接するを以て東鑑の意を誤解して明石郡の須磨と云ひしなれ然らざ

れ之關屋跡に東西の兩説あるを知らず今關屋跡と唱ふる地を以て顯昭及び名稱方角抄の記誤解せるものなるへしざるにても八部郡まても播州に屬せりといへるは大ひなる誤りなり近刊の播磨名所圖繪に瑠璃はもと明石郡と記せるも東鑑などを誤解せしにあらざれば播州名所巡覽圖會を直寫せしものならむまた八部郡及び須磨村について諸書を見るに

所歴日記 ありて須磨に里に來ぬ東須磨西須磨濱須磨とて三所あり

遊方名所畧 須磨浦東西二里之間有四箇村中之長各半里許八部郡一作八田郡一作無田字也

遊藝勝記 須磨は東西中八三村あり東須磨とは烏池までを云ひ烏池より西千守川迄濱中須磨と呼ひ千守川より西小天井川迄を濱須磨と唱へ小天井川より西濱茶屋と云ひし由傳ふきと東西中の三村ありと云ひ四箇村ありと云ふも二書とも誤まれるにはあらずし

ありし三村四村ありしは里人の一時の呼び名にて中須磨より西は只須磨一村なりなるへし八部郡も延喜式にて八部と記し側らにヤタベと訓あり和名抄にて八田部と記して見ゆれどもとは矢田郡郡なるへし東須磨は昔辻堂村と呼びしものなれと古へより須磨の浦といひしは西須磨のことなると明けし

須磨の解

此地を瑠璃須磨麻麻廣須磨須磨など諸書に記るせと延喜式には須磨の字誤記したるもとは瑠璃と書るなりとあり攝陽群談にも須磨或は須磨に作る正字瑠璃とするものかどありされは瑠璃の字は既に奈良の朝のやとより用ひしものと思はる諸國部内郡里等の字を擇ひて二字に改め書きしは必ず延喜式より始まれるとに之あらず瑠璃の字を須磨に改先しも延喜式以前なると同書見ても明かき須磨などの字は正字にあらずるへしまたすまの浦とは人

皇十一代垂仁の朝に始まれる由傳ふれと何ゆへすまと云ひしや代意は諸書に見へす八雲御抄に源氏物語須磨の卷のありすまの字らみづめもかしきをしはやくのまやいあふもはん代和歌誤解きてこりすまとは不慮と書なりまの字心なし須磨の浦にいひかけすとも云々こりすまのうらなと云か々たるはこりすまと云心によとかなへりすまにかさるへしたとこりすまと斗はこりぬことなりいぢくにも讀むへいとあれとたゞ歌を解せしのみにて須磨の意義を解らす一説によれば津の國西南の隅に當れるを以て始先は隅と唱へし瑠璃の二字に改先しとる里人の傳ふる所は今の綱敷天神の側にある諏訪の社は東向き諏訪とてむかしはその名高くこの社あるによりて始め諏訪といひしものと星霜を重ねる其の中にいつしかすまと轉訛せしとてなむこは暫く讀む人の判斷に任せん

須磨の風景

風光のたくひなきは云ふまでもなく須磨の友にも

昨日よりなかくらせどもあかね所なり
静なる海の茶しき松の色山のすかた熱海鎌倉などおよぶ處にあらす此處もこそ吾家をつくら先と思ひそめぬ

と見えたれと今とやかくいはひは殊更先けと後ろに峰つゞきの山々あり前へには茅渚の青海原横たはる向ふ遙かに東南ふ連りて紀泉の山見え西南は淡路の岩屋真近く青み渡り白帆は遠らこちに連り鳥の浮へる如く磯うつ波は沙子を洗ひ松の緑りのうつろふ様得も言はず夜は漁火舷燈の海上わたり四五里か程と星の如く或は明かみ或は幽かに数えれす殊に後ろの山の花上野の臺の月鉢伏鐵柵の峰の雪など四氣折々の景色を添へもし釣舟と棹して遙か沖合よと眺むれば青松白沙遠く連りて茅屋を

の間に見ゆる漁村の光景また一段の趣あり夫の春有萬樹之花夏有百尺之泉秋有千里之月冬有數重之雪とは此地をいふへきか扶桑名勝詩集には

若木櫻花 上野夏草 關屋間月 武峰晴雪

須磨寺鐘 兵庫歸帆 一谷古城 鹽屋暮煙

磯馴松風 後山歸樵

の十勝を綴り出り或は上野櫻花天神濱納涼月見山明月鉢伏山暮雪を記するもあまた須磨名所獨案内にと

關屋跡秋月 内裏跡夜雨 鐵柵暮雪

淡路島夕照 上野落雁 鶺鴒晴嵐

須磨寺晚鐘 明石歸帆

の八景を記せり皆な眺むる所に就て擇ひいたしたるものされと地の品目據るところはといふへし

須磨の人家

西須磨の人家之後ろに上野の臺を負ひてその

麓に帯の如く建て並ひ東須磨の地の平かにて人家はその中央を貫て殆んど西須磨につ

けり概せ西須磨の漁村にして東須磨は農家ありといふも不可なきに似たり古へは月見山の麓字古屋敷に僅かに十七軒の住家ありその後ち上野に移り漸後に及んで海邊に住ひたる由にて今上道と唱ふるは鉄柵山の北の方よを播州へ越せし舊道なるとされ今西須磨の人家あるあたりは海潮の打寄せし處をらんか源氏物語 かのすまは昔ある人の住家をもりけき今はいと里はなれ心すこくて海士の家たに稀になん有ける

所歴日記 蚕の家たに稀にぞん有けると源氏物語には書たれと今は萱茨數多たち双てありされど人氣絶へていと物さひしき所あり昔の人も物やさひしき須磨の關もりなど讀みも理りともかもひて「すまの浦物けひまき所とも知らてやほまの住まきにけん」心われは心なき身と成にたりと詠した

くひにはあらておのつから心を記身もさき事をしらぬはとり所成へし

遊藝勝記 所のさまはあなからに是迄と目留まるところを茶れとも山方か茶たる家とも物置なけるに柴垣打しつゝ竹の簀垣のふしにくけに見えたるも彼昔の御座所の標思よそへられり
されと昔より人代住家ありにもかゝはらて海藁の煙も跡たへて數年前までには月卿雲客の閑居壽永建武の戦むなど千歳のむかし忍はれていとと凄しかりしは今に始よりたるにはありし

須磨乃舊家

此浦の舊家として昔より子孫繼續せるものは

林、志賀、村井、丹治、藤田、

原田、前田、友好、頼廣、

の十戸にして林氏は仁和年間須磨寺開山の開鏡上人の生れたる家にて古書多く藏せりと

と前田氏の事と後の項に記るせり此里は昔より薬師頭人衆青帽子勸道等の儀式ありて此等の席に列する其血統を以て席を定め或之上中下座の分ちあり住家を造るにも貧富若くは血統に由て上中下の習慣あてて其の上なるものは家の構へ方意の如く自由あるも中なるものは皆簷を中に爲し下なるものは外簷にて兩戸の中に簷を設けると能はず或は二階を建て中敷を設くるを得ず移住せる家には屋根に瓦を禁し名前を附するにも移住の人々は右衛門を用ひ古へより住居の人々を左衛門を用ひと云ふ(今より百年前九左衛門と云へる人始めて瓦をかや(以て屋根を造り村人の目を驚かせり)と云ふ)

風土氣候

天然の風光と古跡に富み土地は砂礫にして深層は堅きと巖の如く粘土斜に海に向ひて傾る故以て後の山々より流るゝ水も溜ららず故に海邊と雖も沙子を穿ては水いと清く空氣は絶間なく自然の交換行はれ毫も不潔の物を

交へず冬と後の山々涼しき朔風を禦き特に黒潮の餘波と紀淡海峡より來れるを以て海風温く夏と涼風南北より吹き絶へず四時の氣温にさしたる變りなくいと適當にして乾燥または濕潤に失せず氣壓は一様なるも其の度甚た低からず一帯の松の林には的列並底の芳香を吐き大氣の中には多量の阿巽を含み居て種々の黴菌を撲殺し空氣清くせり實に避暑保養若くは隱士閑居の所として適當の地にしあまは近ころおちこちより四時の茶し先なくつとひあゆまざるも繁榮の勝區とはなりぬ療病院々長に請ひ得たる風位及び氣温比較表を左にしるしぬ

風位	須磨	
	夏	春
冬 晝夜共西	晝間 南	午前 東南 午後 西北(微風)

表較比温氣均平月七年七廿治明

時	山岡		磨須		阪大		都京		京東		時刻	攝氏
	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時		
32												度二十三
31												度一十三
30												度十三
29												度九十二
28												度八十二
27												度七十二
26												度六十二
25												度五十二
24												度四十二
23												度三十二
22												度二十一

表較比温氣均平月一年八廿治明

時	山岡		磨須		阪大		都京		京東		時刻	攝氏
	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時		
7												度七
6												度六
5												度五
4												度四
3												度三
2												度二
1												度一
0												度點
-1												度一下點冰
-2												度二下點冰
-3												度三下點冰

須磨の繁榮

西須磨の療養遊園の地となりてより人口月に増し戸數歳々加はり遂に警察署郵便局の新設を見るに至りし程の由來を尋ねるに明治十八九年はころかひまゝの里人と漁農のみを營みしか不景氣うちつゝき地所を賣り拂ふものゝみ多くして最上は田地すら坪三拾錢より貳拾錢以下落せしも廿年の春頃より他方の人々此地を購はんとするもは多く某氏は八本松の邊を坪貳拾五六錢に購ひ某氏は内裡跡の傍を坪五拾錢内外に求め某外人などハ小天井川の邊りを坪六拾五錢にて購ひたりと聞く然るに山陽鐵道は設けられしよりますます勝貴またれは今と海邊にて坪六七圓の賣買を見るに至りしとなむ西須磨の繁榮なるに東須磨と海濱より別業散見する乃みにて別且地所は勝貴をきと風景の西須磨に及ぶるか故なるへし

須磨は旅館

この浦に遊ぐるゝ旅客を數ふきは毎年一萬二千人もありと聞ゆれと旅館はたゞ海月館保養院松の家敦盛樓海山樓あるのみ且て海月館と一ヶ谷の麓に松の家と軒を並へて海に向へり保養院ハ二の谷と三の谷の境老ひたる松の茂みか中に幾棟となく建て並ひ實に須磨浦第一の旅亭なり敦盛樓は敦盛塔の南にあり海山樓ハ境川の西にありて眺望また自ら趣をことにせり何れも皆海水温浴及冷浴場の設るあり其の他に下宿營業をなすもの林良兵衛志賀新左衛門藤田芳次郎森本政次郎鶴谷松左衛門原田虎吉岡田喜平志賀傳左衛門岡田小三郎友好拾次郎全吉左衛門等にて農家漁家なども暑中には悉く客を以て満たせり

海水浴

海水浴ハ避暑の人々か主とす所にして潮清

く海淺ふまで波のいと靜かあるは鎌倉大磯小田原或は興津などの比ふへくもあらず朝な夕なに幾むれどなく海邊に出ても色くろく裸の童等うち交りて引綱せる様など眺先つ海水浴を試すもあり小石を拾ふもあり遙か沖合に游泳するもあり斯る繁榮を見るに至りしと明治十四五年は頃兵庫縣廳より保養院の前の濱に浴場を設るに始まれりと

幾度か沈みはつへくなりながら 坂正臣
猶こり須磨に波かつくかな

療病院

三の谷は上松林の中に六棟の洋館一段と一段より高く聳ゆるものは即ち療病院あり明治廿二年八月今の院長鶴崎平三郎氏か須磨の氣候療養に適せるを驗して姫路人士と謀り此眺望佳絶の處に設けられたるものにて病癒し罹りてこゝに来れる人々と皆な治療を受くるか故にまゝ病室の不足を告ぐるとありと聞く

世の避暑療養地は多くと良醫を欠きたる風土温泉或は海水浴などに任せて還つて大患に陥るもの尠からねとこの里に遊はるゝ人々と療病院の設るあれば此上もなき事といふへし院長鶴崎氏より寄せられたる同氏の著書「須磨療養地」を見るに中に左の如く記るせりこゝに擧げて讀者に紹介せむ

須磨の氣候は呼吸器病者の療養に適するの
とならず身體組織成分の新陳代謝を旺盛に
去食機を興奮せし先營養を増進し體質を改
良え皮膚及び神經を強固ならしむるを以て
慢性胃腸病者腺病其の他營養的諸病患者神
經衰弱其他一般の虛弱者等の療養にも良る
し且古來世人の熟知する如く脚氣に向て殊
効あると其の風土清潔にして該病々素の存
在するなく而して體内の病素は旺盛なる新
陳代謝に由りて速く排泄せらるゝに職由せ
る者とす云々

須磨浦療病院の實驗を徴するに有熱なる肺

癆患者は該地に來りて速に解熱せる者實に百分の六十七は多きを算す是れ蓋結核微菌と共働すへき微菌の極めて僅少なるに歸すへきか云々

此里は沿革風景氣候より最近の實況をこゝに述へ來りて榮へゆく太平に御世といへ外つ國人は高樓こゝかしこに聳えて見おれぬ草木生む茂れると此里は面目にや海邊に別業軒を並へて見ゆるは此浦は眺先にやまた療養閑居地は資格を

西 須 磨 村		明治十七年調査		明治廿九年調査	
宅地	七町七反五畝歩	宅地	十町一反六畝九歩	宅地	十町一反六畝九歩
他方人所有地	五反八畝歩	他方人所有地	十八町四反一畝十五歩	他方人所有地	十八町四反一畝十五歩
戸數	二百〇八戸	戸數	三百三十八戸	戸數	三百三十八戸
人口	九百五十八人	人口	千六百六十人	人口	千六百六十人
内他方人	三十六人	内他方人	三百〇二人	内他方人	三百〇二人

害ふなきや今如くに推し移りゆき遂には名稱古跡影を失ひて俗地と化し終らひはいといと口れし事こそ是より名所古跡乃記に移らむ

須磨に雜詠

須磨里須磨浦須磨海須磨沖須磨泊須磨濱或は須磨入江などの古詠いと多し攝陽社談に須磨海に風す須磨浦向へり須磨濱須磨村に須磨入江須磨村にあり村と讀める歌未考へすと見ゆすまのあまの鹽やく煙風をいたみ 讀人まらす
 思ふぬかたにたなひさけけり
 すまの海士の鹽焼衣おさをあらみ 同
 まとをにわれや君かきよせぬ
 ままの海人の鹽焼くきぬのなれなほか赤人
 ひと日も君淡忘て思はん
 白波はさてどころもにかさならず 人 丸
 明石も須磨もれのかうらうら
 すまの浦に焼しほ鹽のけむりこそ 俊 頼

春よりささのかすみありけれ

すまの浦をけふ過ゆくとしかたへ 能 宣
 かへる浪にやまを傳まし
 さみたれいたくもの煙うちしめり 俊 成
 し得たれまざるすまのうらら
 須磨のあまの袖う吹す鹽風の 定 家
 なるとはすれと手にもたまらず
 馴行て浮世なればすまの海士の 女御徹子
 鹽焼ころもまをなるらん
 すまのうらのなきたる朝はめはるに 藤原 孝
 霞にまかふ海士のつり舟
 すまの海釣せし人もなふよりや 惠慶法師
 千とせの松のえにわたるらん
 待とをよ都の人やおもふらん 同
 須磨は濱邊はすみよかりぢり
 すまのあまの浦漕舟の楫を絶 小野小町
 よるへあき身をかきしかりける
 風をいたみくゆる煙の立いて、貫之朝臣
 あはこりすまのうらそ戀しき

藻鹽くむ袖の月影かの川から 定 家

よそにあのさぬ須磨のうらひと
 藻鹽やく煙になる、すまの鹽は 讀人しらす
 秋たつ霧もわらすやあづらん
 春くれは須磨の山里とありて 行 平
 とやこかましき梅の香衣
 須磨の鹽のうら漕舟の跡もなき 西宮左大臣
 見ぬ人こふるわれやなになる
 立登るも一やの煙たへせねと 藤原經衡
 そらにもしるき須磨のうら哉
 すまの浦に鹽のそりつむ藻鹽木の 藤原清正
 ちらくもしたにもへ渡るかき
 淡路かた追門の汐子の夕暮に 西行法師
 すまよりかよふ千どりなくなり
 行船のあとの白波さえおきて 良 經 公
 うす霧のこるすまのあなづの
 すまのうら波路の末は霧晴て 藤原宗泰
 ゆふ日にのふるあわ路島山
 藻鹽やく煙なたてすまの海士 津守國冬

ねる、袖にもけきは見るらん
 あまとはなきさに歸る白波は 頼政
 なほより見るやこりすまのうら
 もし得やくすまのうら人打たて 通俊
 いとひやすらん五月雨れそら
 かのはから移ふ花に人間は、 前攝政民部卿
 すまれうら風わふとこたへよ
 須磨のうらにとこともなき煙哉 後鳥羽院女房
 雪はあしたは海士のもしや火
内裏名所百首
 すまの浦に秋やくあまの初盤は
 茶ひりと霧は色をそへたる
 すまのあま乃まをの衣夜や寒き 家隆
 うら風なから月もたまらす
 いつそあれど須磨の鹽焼なれをしそ 豊原統秋
 哀れと思ふ秋のうらなと
 戀をけみ須磨の浦ある濱ひさき 親隆
 たれるとしらぬしはれたりとは
 すまの沖の霞衣たちぬれば 盛方
 いづれか浦とみえまかひぬる

かりそめに關もる夜半の寢覺迄 沙彌寂蓮
 袖にふれたる須磨のうら風
 須磨人ほ海つねさくらをやく塩は 讀人志らす
かふき戀をも我はするかも
影供歌合女房
 吹過る須磨のうら風怨むなよ
 秋のけしれたいとよめ置ども
 須磨の蟹のもしほの烟忽ちに 前原良經
 ひせふ思ひを問人のなれ
 すまの浦もしほ枕とふ螢 定家
 かりねのゆめ路わふとつけこせ
 藻潮たれ干る間もなきをくらに 家隆
 問どもまた一すまのちみ風
 旅寝する須磨のうら路れ小夜衛 同
 こゑにそ袖のなみこかけられ
 煙たに及はぬ空にきえわひぬ 經通
 いかにすまの海士の藻鹽火
 世を絶て波は浮寝をすまの蟹は 範基
 かくやは袖のかごとく時なれ
 すまのうらや波の千里に立てめて 信方

かすみみのこる淡路しま山
 すまの海士の波の枕に鳴千鳥 藤原經京
 幾夜のゆめのせきとなりけん
 ほしあひの手向且須磨のあま衣 安禪寺宮
 かすてふこともまをなるふん
 須磨のうらの藻鹽の煙いつかさて 冬頁
 思ふかたにやたちちひくらひ
 蛸人のたつる煙と見えわかて 定家
 かすみそはるほもしややさける
 藻鹽やく蟹のどまやは夕煙り 藤原秀能
 たつ名も苦し思ひたぬなて
 いづれもと誰か言けむすまの浦や 似雲
 かゝるところの秋の夕暮
 絶て見ぬ藻鹽のなふり立返り 同
 むかーにかかすむしやかまの浦
 鹽たれー昔の人のこゝろまて 同
 今日くみてゝるすまのうらなみ
 須磨のうら物さひしき所とも 石出常軒
 しらてやあまの住なれにけん

播戸路やすまの關守る身なりせば 待賢門院長門
 わかぬ別はゆるささらまし
 戀のみ須磨のうらほに鹽垂て 前齋院安慈
 焼とも袖をくたす比かな
 すまのうらに網くり卸すうけ舟の 源親房
 打かふきて世を歎く哉
 すまの蟹の鹽屋も雪に埋もれて 藤原公仲
 たくものけふりゆく方もなし
 汐路より秋や立ふん明かたは 俊成
 こゑかはるなり須磨のちみ風
 いとしく都戀さ夕くれに 俊頼
 ちみの關もるすまのうら風
 阿ま小舟月と共にや出ぬらん 阿闍梨遍曉
 きりふきはらふ須磨のうら風
 すまのうらや汐焼衣うちわひぬ 法師長舜
 あまの苦屋のあきの夜さむに
 須磨の蟹の苜蓿を磯の玉藻たに 爲家
 さらみしやる、五月雨の空
 及ま乃蟹の藻鹽の煙一かたに 師兼

なひかぬさを何なぐらん
宗真親王千首
すまの浦は蟹の苦屋もへたりて

さりのたへまに海少みゆ

須磨の浦や蟹の衣のはす日さへ 侍從中納言

まどをにはるゝ五月雨のそと

正治二年百首
すまの浦のあまの漁火たき捨て

くゆる煙を空にたてける

内裏名所百首
旅衣またひとへなる夕きりに

煙ふさやるはまのうら風

同
藻鹽やく煙と霧にまされねと

行ゑもみえすはまの浦波

同
明渡るすまの浦はの霧のまに

たえくみゆるこつ雁の聲

淡路島ゆふい得先や立ぬらん

はまのひかひに千鳥をくま

同
須磨のあまの焼く煙煙尋ねても

靡なふひをいかにしふまし

最勝四天皇院障子和歌
馴ぬどて袖にや遠き夜のなみ

はまの浦かせ秋をたてたて

同
秋は荷衣手さひみもしはやく

あまりにふくやすまはうら風

同
ことうとて詠なれたる色もあし

あさしもしるき須磨のうら風

同
幾度かたなし寢覺に馴ぬらん

苦屋にかゝる須磨のうら波

すまのうら通ふ衛の身にあらは

繁子
ゆきみましを淡路しま山

立かへり見れば懐し昔しわか

税所敦子
そとぬらしつるすまの浦波

まかね路の音たへはて、たけぞは

鈴木重嶺
浦邊にしはし千鳥なくなり

獨りもの思ふ夕へと須磨は浦に

竹の里人
西風はさと混たつらも

すまの浦の時雨る、隙を入日さし

青桐は舎
白帆はきゆく淡路しまかな

風誘ふはまのうら波たち騒き

同
くれてそ行く棚な一ふね

鶯も海むいて鳴け須磨の里

芭蕉

我吹てわか聞く笛もはまの秋 同

一夜荒てあからさまも浦の冬 同

北條霞亭

一方雲樹間須磨、關趾何邊渺碧波、浦上秋

風衣袖冷、行人閑唱納言歌、

梁田蛭巖

鐵樹峰頭纖月低、故關雲墨水禽啼、漁舟一

去無消息、夜半火來蘆竹西、

小畑詩山

海上風恬浪不生、齒牙爲盾筆爲兵、蟬聲蝶

影山村驛、馬載詩人隨意行、

源季融

須磨浦口雨晴天、淡島糺糊半鎖煙、一片藍

帆十字白、傍人共說是阿船、

岡壽卿

海門斜日落平沙、葦箔蕭然幾十家、不識何

人今夜主、蒼々夏木總無花、

何禮之

昔人遷謫地、歌詠被神京、烟浦瀟々雨、松

秋やすますまや秋しる麥日和 同

海士の顔先見らる、やけーの花 同

すまの蟹の矢先に鳴か不如飯 同

やとくさす消ゆく方や島一つ 同

月を見ても物たらはずや須磨の夏 同

冷汁やすま淡路の帆のけ舟 同

すまのうらの年とりものや柴一把 同

見渡せら眺むれを見れば須磨の秋 同

力あう入かゝる日や須磨の秋 同

ほろくくと雨うふすまの蚊遣哉 同

元日やたひとはわれをまのうら 同

いとりせし蒲團干したりすまの里 同

道はたに稻不す須磨の日和哉 同

来て見れば風か吹也すまの秋 同

すまの海士の弓矢飾りし雛哉 同

冬のすま尚青くと寒茶なり 同

すまのうらやけを御祓の立男波 同

海士の子も娘盛りや磯わか菜 同

明やすき窓にはふや松の風 同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

涼菟

瓢水

西月

蕪村

蕪水

子規

永規

獨來

獨去

菟好

露城

同

林謖々聲、千秋仰高韵、今日有餘情、勝蹟
知何處、清風伴月明、
白沙涵曙色、夢覺已天明、遠嶼映中影、春
濤枕上聲、蘆搖雙鷺舉、漸淺一舟橫、隣翁
不期至、相約釣魚行、
前山收夕照、緩步出松杉、獨倚沙邊石、聞
看雲外帆、月華浮雲浪、龍氣襲秋杉、靜極
人將歸、怒潮來嘯崑、
屋依青嶂麓、門對白沙濱、談話多耕釣、往
來忘主賓、筍羹聊代肉、村釀可濡唇、愛此
幽居樂、悄然出世塵、
小閣欄前景、空明望欲迷、陰晴山遠近、潮
沙水高低、帆影夕陽外、檣煙煙渚西、沙禽
不知數、泛々與波齊、
撲面紅塵拂又生、滄浪好去濯塵纓、松風村
雨須磨浦、烟島雲帆明石城、開落關心花處
々、眠餐隨意驛程々、沙邊鷗鷺知無恙、應
喜來尋海上盟、
消夏何憚千里遐、須磨浦上臥青沙、江山古

蹟源平夢、箕笠生涯耕釣家、遠島蒼茫留夕
照、輕帆趁參伍晴霞、秋風不用催歸興、鱸
膾尊羹辨咄嗟、
紀山連淡島、嵐翠如屏張、遙隔一江水、蒼
波何渺茫、青松覆白沙、松下結小莊、時際
春潮漲、一村漁事忙、舉網聲軋々、挽索人
行々、老妻理絲綸、稚子守釣航、餌多見鷺
集、罾開跳鱖魴、觀斯眼前景、欣然命杯觴、
贈切銀鱗細、酒斟葡萄香、漠々晴靄曳、葉
々雲帆颺、空江日將暮、遠峰留夕陽、微風
拂々至、襟懷清以涼、江山入圖畫、幽致似
瀟湘、滾々京華塵、不到水雲鄉、夢寐自怡
曠、奚勿住滄浪、
橋本海關

腥留地上、滿汀無處不飛鴉、
松風隔海鼓青波、坐見漁舟載網過、風雨今
朝誰問古、水禽聲送納言歌、

大庭景陽

白帆遠傍白沙多、十里松籠十里波、笑我風
流緣不盡、一年三度過須磨、

草場佩川

時運瀟關廢、兵墟蕭寺深、垂簾非御殿、破
宇寂名琴、風雨黃門夢、文章紫史心、海波
添客恨、暝作鼓鼙音、

股野藍田

遷友離憂空復情、鑾輿駐驛跡分明、竹籬家
詫王孫裔、蕎麥店呼公子名、割谷沙痕猶異
色、走崖雲影似爭衡、無腔樵笛帶清怨、吹
入松風村雨聲、

直井關山

獨臥南樓夜不眠、起看山月照籬前、初覺今
宵春已老、杜鵑啼度海南天、

在原行平佻住の事蹟

千種日記 福祥寺を出て東の岡に松の多く
立るを稻葉山と云ふ昔中納言行平の住給ふ
舊跡なり
須磨名所記 中納言行平配所の蹟いつかた
ともしる人なし
遊方名所略 行平所遊上野里也常愛梅菊親
植之又持驛路鈴於舟中常遊海邊
攝陽群談 村雨堂の地を指し行平卿爰も配
流し云々
攝津名所圖會 東須磨西須磨の間字を菖蒲
小路といふこれ也
播州名所巡覽圖會 一説に東須磨西須磨の
間字を菖蒲小路と云ふ所其蹟也といへとも
其證たゝのなから
今里人の傳ふる所は攝津名所圖會みれなし
仁和二年十二月光孝天皇嵯峨の芹川野に行幸
し給ひし時この卿供奉せしかおのか論に六

十九歳(攝津御書ニハ七十一歳ト見ユ)の高齡なるみ袂に鶴乃紋ある狩衣着けたるは老の身に適はぬとて

翁さひ人とかめそかりころも

けふはかりとを田鶴もなくなる

と讀みし帝時に五十七歳に涉らせられ詞不祥なりとて須磨は浦に謫せられ須磨の配所に三歳住はれ終に赦されて再び都に歸りしと傳ふこの卿の謫せられし記事と右の諸書にも見ゆれと古書を搜索せまに

古今集 田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍たるみ宮のうちに侍けぬ人よつかとまける

わくらははに問ふ人あらとけまの浦にもまほたれれゝわふと答へよ

伊勢物語 昔仁和の帝芹川に行幸し給むける時なま翁の今はさる事似けなく思ひたれどもとつきに事をれば大鷹飼にて待せ給むける摺狩衣の袂に鶴のゐたをけくり書つけ

る「翁さひ云々」帝の御氣色ありありけりかのか諭を思ひけれと若からぬ人は聞きおひけまとかや

とありて流罪のこと見えざるよ

西行撰集抄 行平身みあやまつ事ありて須磨の浦へ流されもし得たれつゝ浦つたひしありきたるにあるあまにいつくにやれむと尋ね給へは「白波のよれる渚み世流はこれあまの身なれば宿も定めぬ」とよみてまされぬ云々

帝王正統錄 三品彈正尹贈一品阿保親王御子大江音人在原行平守平業平五男也行平仁和三年配流須磨號正二位民部卿中納言權師在納言云々

とあるは古今集伊勢物語の記事ある其上み源氏物語み

須磨の巻 おはれへき所は行平の中納言のもし得たれつゝわひける家居近き邊なりけり海面之やゝ入りて哀に心けこるなる山中

葉 箒

東須磨のもとの村役場のあたりの地名なり其の故を聞くみ昔し長州侯參勤の途次此處に休まされける時葉かりの箒を以て塵を拂ふものあり候其代箒の名を問ひけれと此者葉箒と答へぬ後の人その智を稱へ遂に地名となりしとそこの處にて葉箒脚絆あるものを鬮さて名産となせし由なれと今は見えぬ

葉箒て案内とりて西 東 蜀 山 人

すまからすまへちりものこさす

行平衣懸松

西須磨より駒か林に通する東須磨乃辰濱といへる處にあり此松明治廿三年七月村人斫て薪となしされは今は切株のみ存ぬ

須磨名所記 南濱邊に行平松あり此松を松風村雨の舊跡ともいへり石塔もあり

本朝俗誌 行平松須磨の濱邊小松原の中に

なり垣のさまより始めて珍らのみ見給ふ葦家とも葦ふ茶ふ廊めく屋をとかいうしつらひなりたり云々

と記るされたるを見てかくは附會せまなれ里人の傳説はこの撰集抄とより出てし事ならむも多くと謡曲によれることなるへし然る時は流罪のことは無根にして行平自ら謫を引きは須磨に塾居せしこと異なるへし三歳この地に住ひまどの事は諸書に見えされは詳かならず

西岡宣軒

比屋湘簾鎮浦烟、黃門遺跡定何邊、松風村雨須磨夕、哀響依稀譜古絃、

大沼枕山

能通吏務孰能倫、忘却皇孫至貴身、絹布賻家眞死友、餼糧給國是良臣、須磨當日無雙艶、獎學終生只一貧、美貌善歌皮相耳、將言正士更才人、

すくれたる大松あり俗傳行平卿手つから植玉ひし松也行平歸洛の名残をふしみたりとて枝葉悉く東へ垂たりもとは半より相生なりしか今は老樹となきて梢枝とも朽て幹は三周回となるかろうに成たり

曲に基き衣懸松の名も起りまものなれ之行平手植の松と云へる方真ならむ近年まで松の下に石塔ありしとは今に傳ふれども二女の舊跡といへるは作り物語にして松の枝の東に靡くとの所傳も磯馴松の項にしるせし如く廣巖記にならひたるもけなり

行平月見松

攝陽群談 行平松東須磨村あり俗傳に云く行平卿は植えし松歸洛の名残を惜み枝葉悉く東に靡くとなり本一木に生し半よま相生と成れり

東須磨の北の尾崎因幡山の前に古き松は茂れるもけを月見松と云ひ此山を月見山と呼へり行平卿賞月亭の舊蹟なるを以てなりと八十年前までは行平の石碑ありま由なれと大風雨の時谷底に落ち土に埋れたりとて今は見へす千種日記 稻葉山にあり今も此松を月見の松と云ふ

所歴日記 行平卿の月見の松とて東須磨の北なる山にあり

攝陽群談 東須磨村北の平山にあて松と一

遊囊勝記 衣掛の松とて濱手ふあり

播州名所巡覽圖會 衣懸松因幡遠山松此等皆後世乃戯作あり

播州名所圖會 衣懸東須磨は濱邊にあり松風の謡曲によりて名つけ初しならん

諸書概ね行平松と記し衣懸松と云はす衣懸松と云へはこそ今は行平歸洛を惜み此松に衣を懸きて去りしと云へるなす謡曲に行平歸洛

は磯馴松を形見松など云へると同じくこの謡

木よあらず纏く並木の森を云ふ行平是に於て月を詠む其景色他に勝れたり

遊囊勝記 稻葉山一名月見山といふ月見の松として此山にあり

播州名所巡覽圖會 行平月見松東須磨の北の尾崎に古松の大樹七株あり

磨須名所獨案内 中古津田大炊頭此山に城を築く其年月詳ならず又慶應年間此山上へ

長州侯陣屋より哨兵の出張ありし所なり月見山とは稻葉山の名にはあらざり一部の名なり皆後の山のうちに属せり

帆もまろし廣野をはしる玉兎
まはか茶や月と三五夜中納言 貞室

遠山松

上野は後の山一帯の松を總稱して遠山松といへるなり

攝陽群談 須磨寺の後山にあり土俗の傳へて松風の謡に寄ると云へり因幡山後の山

なんと云も此邊にあり

播州名所巡覽圖會 遠山松後世の戯作也

攝津名所圖會 因幡遠山松は月見の松より寅卯の方半町計にあり松風村雨の舊跡ともいふ按はるにかの卿の和歌より名けしならん

因幡山

東須磨と西須磨の境に一段高さ小阜ありこれをいふなり

攝陽群談 因幡山民家の後を以て一名後の山と稱す行平卿の配所みなそらへ世俗松風の謡に寄て號之

遊囊勝記 稻葉山一名月見山と云ふ千種日記 福祥寺を出て東の岡に松の多く立るを稻葉山と云ふ

月見山因幡山後の山といふも一の山を指えしといへるの如きも因幡月見の山々は前にもいへる如く後の山の中に含ま居れば右の三書の

記事は誤れるにあらす所傳に行平卿乃立わか
れいなはの山の峰ふおふる松としきかは今の
へりこむと讀まれたるこ此山をいふなりと
勝地吐懷編 和名抄に因幡法美郡に稻羽の
郷あり是なり文德實錄には齊衡三年行平
卿因幡守となられたれば其の時の歌なるへ
し六帖に國といふ題に入れたるも武藏國の
武藏野のことく國と山と名を同じくするゆ
へなり

この契沖か記事による時は此歌は行平卿か因
幡守となり京を去る時に讀と殘しること明
かにて要するに此歌を讀まれたる同卿か其
歌に讀と入れたると同じ山ある此浦は閑居せ
しを以て後の人誤り傳へたるものなるへし
攝津徵書 任終て歸洛の時二女に玉ひし歌
「立別れ云々」と讀みて玉むし也

行平卿か此山を歌に讀と入れしものなりとい
へる傳説の外に松風村雨の二女に給ひさる歌
なりとの一説を加へかくも據どころあるの如

くに記るせども曩に杉谷氏に書を寄せし時左
の如き解答に接したれを撰集抄謠曲などより
出てさる附會の謬説に外ならざるへし

(上略)

立わかれ云々乃歌につき御質問相成右は攝
津國須磨にある因幡山なる由某書とやらん
に御座候との事なれとも貴説の如く今日迄
先哲の説ふは決して左様なる事は無御座候
彼の歌は文德天皇齊衡二年正月從四位在原
行平朝臣爲因幡國守云々と文德實錄にも相
見候その節京に殘されし人によきて遣はさ
きま事に相違無御座候總て古今集に單に題
しらすとして載せたる歌は大方京より他へ
發足する時ものにて他國にあて讀みた
るは其の故よしを記しあるが通例の標御
座候又因幡國法美郡に因幡といふ地名ある
は和名抄にも相見候へは或は其の山をさし
たるにてもあらんか乍併單に因幡國をさし
てよめる歌あまた有之候へは矢張大らかに

見たる方よろからんと存候躬恒集にも因
幡守の下るよ「一日たに見ては戀しき君か
いさむ年の四とせをいかて過さん」ともわ
り又後撰集にも家も侍り女子いかなる事
にか侍とけん心うしとととめかきてまか
りければ女「打ちすて、君しいなこの露の
身いれぬはかりそありとたのむな」とも
有之候此等皆廣く因幡國をさしてよめるも
のに御座候されは行平の歌も廣く因幡國を
さしていへるに相違あるましく候彼須磨浦
古跡誌とやらんに記し有之候は「わくらは
に云々」の歌より出てたる俗説の松風村雨
の古事に附會したる謬説と相違有之まじと
存候行平は須磨浦に流されたる事も何も無
之唯古今集も出てたる「わくらはに」の歌は
何か執務上も過てもありて自誦身の爲暫く
塾居したるものに御座候へは須磨浦にて「
立わかれ云々」の歌杯をよむへき筈も無御
座候松風村雨の俗説も西行の撰集抄「し

ら波の云々」とよめる歌より附會したるも
のにて取るに足らざる謬説に御座候右は須
磨誌御編纂中と乃事に御座候へと委細愚説
を吐露致し申候御參考にも相成候は、幸甚
に御座候(下略) 井口隆太郎改 杉谷正隆

松風村雨堂

村雨は月にとうとしまつのかせ
西須磨の東の端街道より北ふあたり大ひかる
松のある所なり近頃まで辻堂あり里人相傳て
村雨堂といへり所傳は行平卿謫居時村長畑
殿の娘もいはこふの二女あり須磨浦に潮
を汲みけるか此所みてこは卿も出遇ひ宿はと
尋ねられ彼女等と返辭なくまら波の云々と
讀みしかは卿喜ひ斜めならず折しも村雨のふ
り來て松風吹きわたり茶れと時ふれたる名
なれやと松風村雨と名つけ給ひ遂に二女とも
卿と睦しく此處まで相通ひ來れるかこの卿
歸洛の後には田井畑と歸れり故に墓は田井畑宇

畑殿ありと云ふ

攝陽群談 須磨村あり土俗は傳ふ云く田井畑村は松風村雨二女代舊栖あり行平卿愛を配流し不慮に見て睦しく通ひ來る處を指して休所亭と号す其舊跡今の俗村雨堂と稱す須磨名所記 村雨堂重衡こしかけ松も同じ所にこれあり又行平松の項に此松を松風村雨か舊跡ともいへり石塔もあり又二女の舊蹟は須磨より一里はと奥田井畑村といふ所あり兩所いつれか是ならむ

攝津御書 松風村雨舊跡 村雨堂 始に諸曲に行平卿二女を愛せし由見ゆれとこれは禮とはあらずと云ひゆきに 行平二女を愛し玉ひし事若き時因幡へ任國に下り給ひし折から此一ヶ谷の北多井畑村長か娘二人有しを召連き松風村雨と號て召遣きしは因幡代國にての事なり任終て歸洛は時二女は給ひ一歌立わかれ因幡代山乃云々と讀みて玉ひ一也此歌百人一首に出て衆人よく知り

るしに古松一株あり

以上は諸説は因幡山の項ことに杉谷氏の書を讀まはれども俗説あると明け

因幡藥師

圓福寺と東須磨にあり長一尺三寸の佛像を祭れり

寺記云 行平此浦にねはせし時の念持藥師なり

攝津名所圖會 因幡藥師と京にもあり在原行平と橘行平との混雜も覺束を此類世に多し

須磨名所圖案内 歸京藥師成就院の名あり又壽永の兵燹に罹らざりしを以て火除藥師とも云ふ(書中橘行平と在原行平を混一あると俗説として見るへし)

播州名所巡覽圖會 因幡藥師は後世の戲作せるもの也

この名勝圖會の記事は京都に橘行平の祭れる

たる事也松風村雨をてふ愛せられは若き時因幡の國にての事也作り物語に須磨代鹽汲海士也と作り出せるか故に甚紛らはし唯物語は事と作物なれば論するにたらず

遊方名所畧 須磨寺の項に寺邊有松風村雨蛭女墓 昔日松風村雨海女二人有汲潮跡於今此處燒鹽也

准后親房記 鷲尾家久と熊王の父あり熊王か母の田井畑といふ所の美女なり此里は松風村雨乃出し所みて昔より惡女すくなしといふ又一説に松風村雨は元讚岐國鹽飽大塚と云者其娘也繼母の讒佞により此所に離れ來りとも云

攝津名所圖會 西須磨は東端街道乃上にあり此地行平卿謫居の地と云ふ即ち高蒲小路と云ふ字今あり謠云松風村雨は二人の須磨の北なる太井畑は賤女なり一か行平召れこゝに給仕しけるとそ近き頃まで辻堂あるものあり土人これを村雨堂と云ふ今はま

因幡藥師を在原行平と誤り傳へて此因幡藥師と在原行平に祭れるものなりと云へるか如く見ゆれども遊方名所略に記るせる京都因幡藥師の寺記を見るに京都五條松原通烏丸に祭れる因幡堂なるものは天徳三年橘少將行平因幡國一宮に參向の時病あつく諸藥も効なき折當國經津海に天竺代名醫ありと夢み綱して藥師を得これを祭りしかは病忽ちに癒へたるにより後この堂に祭りしか中納言行平一夕此に來り「開帳而讀基盤上以其念信急故也於今生基盤上」云々見へたれこの因によりて行平卿此浦にありし時こゝに祭りものにてあらむ寺記に念持藥師とあると一証とすへし

前田氏

この場やとしめく生る眞菅の茅

須磨浦舊家代一なる前田氏の事を記さんに昔井戸莊中莊下莊を領し世々此地の里長にして家の須磨寺の前より二町餘り東に當り道の北

側にあり家譜由書あるものを見されども諸書に記るせるものを擧ぐれと神功皇后の頃よと子孫繼續せり云々須磨記の中に菅公須磨にて橘季祐の家に立寄らせ給ふと記るせる前田氏か祖先のことなり云々同公菅原の姓を賜ふ云々家に藏せる重寶として攝津名所圖會に載せたると菅公自書影同公此里に泊せる弘法大師石像自後陽成院御宸翰 秀吉公筆 三尊彌陀惠心筆 古證文増田右衛門 津田ノ惠閑三夕和歌六條宰相 泉二位爲久卿 菅家須磨記 二位實種卿の筆 一休和尚 三位爲信卿菅家須磨記從二位實種卿の筆一休和尚筆 西行法師筆 制札深川左近松 平武藏守六字名号元祖一廻なるも今と散逸して保存せるも少く上人筆なるも今と散逸して保存せるも少くと惜むへし庭内に菅公手植の松と傳ふるものあり昔雲助馬子などの「須磨は前田のかきつの中にあやめさくとはまらなれた、さいてま得れてまたさく花はすまの前田のかきつはた」の歌を歌ひし杜若も今は見へす

長田社

前田氏の邸後にあり家譜に神功皇后三韓より凱旋して御歸の途次こゝに立寄らせられ出雲國より事代主命を迎へ祭るへしと詔あり前田祖先勸請せり後に及んで今の長田の神社に遷し奉るとあり今は長田社と唱へまゝ元宮と稱す昔は祭典に蠶人形三千三百三十三個をつくり三韓討伐の状なりとてこれを散々に伐りしとそ

釣濱司り賜ふ神と聞いて

土佐針にかくるや土佐の初松魚 溜海

釣さはの糸にさはるや夏の月 加賀千代

つり人にならひて阿鹿さく夜哉 關 更

菅之井

前田氏の邸内にあり菅公此浦に泊せる時この井の水を酌み送りしかは公喜ひ給ひて自畫の肖像を贈られしといふ此肖像を網敷天神として祭れりとの説あり近年まで此の井の水にて酒を醸し菅の井と銘せる由なれと眞の菅の井

はこれにとあらずと里人はいへり

そまに泊りし時前田氏より菅の井といふ名酒を贈る

菅の井をくむともけ死し大自在 湖 夕

名まへたのも神のめくみに

頼政薬師

須磨寺の人家より東半町程にまで道の北に宇下樋詰にあり淨福寺と號す長一尺の薬師を安置せり傳へて聖徳太子の作と云ふ

攝津名所圖會 須磨記に「なにくれとせしまゝに暮ちかふなりそこら上野の岡といふ所何かまの寺あるよしにて鐘さねかへりて耳頭うれひを催せり」とあると此寺のことならぬ

所傳其古へは立派ある寺なりか其の後退轉に及び頼政此を再興し依りて頼政薬師の名ありしとなむ毎年正月八日には夜鬼踊とて數人假面を冠りて鬼に扮し火を點したる竹の束を

手毎に持ちて里人を追ひ狂ふ由にて今に廢せし備中笹沖村東京龜戸神社にも此事ありと聞く其故を知す

重衡腰掛松

須磨寺の前の街道の北に大ひなる老ひ松の株ありこれをいふなり重衡は平清盛か五男宗盛知盛等の弟にて壽永の戦ひに生田の副將軍をりしか軍敗れ西を指して落ちけるに此處の松の下にて高家景季等の爲に虜となす其の時に里人須磨の名物なる濁り酒を捧げしかは

さゝはろや波こゝもとをうち過て

須磨でのむこそにこり酒なれ

と讀まれたる由

攝津詳談 腰掛松須磨寺門前にあり俗傳に云く本三位中將重衡卿の腰掛松ありと今と枯て名のみ残せるも猶哀なり 又苜蓿川の項に此所壽永年中の戰場重衡卿を生虜の所也

須磨名所記 村雨堂の項に重衡腰掛松も同
し處にこれあり

平家物語 主従二騎助船に乗らんとて渚の
方へ落給ふ所に庄四郎高家梶原源太景季好
敵と目をかけ鎧をわけて追懸奉る渚に助
船共多かりけれとも後より敵は追懸たす乗
へた隙もあかりければ港川掻蕪川を打渡り
連の池を馬手に見て駒か林を弓手にあし板
宿須磨をも打過て西を指てそ落給ふ云々
東鑑 元暦元年二月七日日本三位中將重衡於
明石浦爲景時家國等所生處

重衡捕虜の地は苅藪また須磨にわらそして
明石の方真なりし腰掛松は落のひし途次休み
たる所と思はる

近藤鐸山

聞説才流比牡丹、飄零時失恨殘闌、一曲琵琶
琴數行淚、夜帳歌休燈影寒、

藤田吳江

黃門策何壯、卓識冠軍英、乘輿一西駕、誰

復守神京、失策晉南渡、亡國隋東征、幸有
中將在、旗鼓與賊爭、身入萬軍裡、鏖戰風
雨驚、箭竭乃爲虜、寧左驩不行、李陵竊漢
北、文山洛湖城、湯沐賴先德、侍御豈素情、
絃咽虞兮淚、吟哀楚歌聲、特謝泉下鬼、閻
門猶耻生、

橋本海關

囚室燈昏夢屢驚、脫身無復報警情、西溟空
有老尼泣、不獨楚歌四面聲、

上野山福祥寺

墨染の袖もつゆけく思ふらん 何 多仁子
まつの甲のかゝる須磨寺

大庭景陽

青山如夢咽寒潮、秋入蘆花酒易消、遺恨何
人吹玉笛、須磨寺古草蕭々、

淋しさの氣もすま寺や初村雨
須磨寺や鴉もなかな秋のくれ 好笑
須磨寺と春のつき夜と成に見 狸 伴

西須磨の上野にあり眞言古義派高野山蓮華三
味院の末寺なり仁和二年開鑿上人勅を奉して
開山せしものにして本尊は長三尺五寸の觀世
音を祭れり世に須磨寺といふは此巨刹といふ
なり林氏の古書に依れ之天長年間に海中より
此觀音を得北峰山に安置せしを仁和二年勅に
より開鏡上人この地に移し開基せりとあり一
書に之兵庫惠倡山に在りしと見ゆ又賴政再興
の後慶長七年震災にかゝり豐臣秀頼之を興し
十六石の御朱印地とせし由を記るせり今と
廢頽して十二坊も僅かに蓮生正覺の二院を存
そ二王門の力士は運慶湛慶の作と傳ふ中門と
明治廿四年本堂は階の下に移し猶ほ馬廄は額
を掲げありこは教盛の用ひしものにて木は源
平躰躰ありと云ふ上野山の字も今は讀み難し
教盛堂は本堂の側みあり甲冑を着けたる教盛
の像を祭る其の前は老松あり幹一木にして唯
雄の二枝は岐れたる奇しき相生の松あり義經
腰掛松は本堂の西にあり其の西は神功皇后の

松浦川に鮎を釣給ひし釣竿竹なりとてかん竹
と呼へる小數あり

遊方名所略 寺邊有平相國清益石塔及越中
前司盛俊塚又有小松内府重盛遺骨又有松風
村雨鬚女墓

教盛の首塚と同じく此記事總て信を置くは足
らす

須磨寺御藍開基記

此記は偶々攝陽詳談より得た
るものなり今當寺には見ゆす

攝之坂陽成西去十余里抵須磨郷有觀世音聖
跡號上野山福祥寺世稱須磨寺後擁群巒前臨
南海長風時至浪花接天漁舟商舶或王者樓船
來往蕭蕭棹歌白鷗鷺出沒其間半沙灘電線
雲丹々其風景絶出未可以筆舌陳非南海補陀
之梵刹手昔此海中每夜有光達雲漢衆人異之
既而有漁父下網捕魚得一檀木所造觀音像乃
縮小字以安設之其靈應特甚凡有所求靡不隨
意由是達朝廷光孝天皇仁和二年敕文鏡上人
營寶殿丹青爛綺照映林岳遂成梵刹於是懷香
瞻禮者日接踵於道迄今八百餘歲而聖跡猶存

厥後至久壽年間源三位賴政公重新修葺殿宇
支提鎮守神社等煥然一新山川增色靈威益盛
先是平城帝之玄孫黃門在原行平者有故謫此
地期七晝夜謁像期滿夜夢一白衣異人告曰我
非不護汝以汝夙業所感自作自受如蠶處繭如
蛾赴燈若能修善積德三歲之後必得還心覺而
忻然感激無何有蠶女姉妹來給侍左右儀容端
麗柔順慈仁一曰松風二曰村雨經三年果蒙恩
歸京嗚呼觀世音菩薩悲心無盡愍念衆生猶一
子是好現種々形利益衆生使非大悲方便力安
能爾乎臨別手栽松樹以志之曰磯馴松至今猶
存焉云々

什物
保呂衣名号 熊谷直實の筆其側に和歌あり
敦盛書影 直實の筆
法の水すゝと硯て書をくも
心行具 足阿彌陀佛力
敦盛赤旗名号 法然上人の筆
爲敦盛空顔隣清菩提書之源空 側らに和歌あり

音壽丸世にこそすまてふへいりし

彌陀の蓮にともに生るゝ

敦盛の和歌

題庭の雪

よしやたゞとはれても又かくこせえ

なのれ跡なき庭の白雪

寄松祝言

みどりなる松に千とせの色みせて

久しかれとやのさの山風

敦盛の鐘 高麗笛 學前僧正の作 青葉笛

青葉笛

寫畫とこのふゑの世々か茶て 庭田中將

かとのみはたふ須磨のふるてら

笛竹の世のうた節み枯みけん 滋子

青葉もいまは名のみこのりて

梁川星巖

須磨浦上吊王孫、芳草斜陽古寺門、忽破山

僧勾引去、一枝湘管認啼痕、

所傳に僧空海入唐の時自ら作りしものあるか
不思議にも二枝生せしを以て時の天皇に獻せ
しかは青葉の名を給ひ後鳥羽天皇より平氏に
下し給ひたりといへり

平家物語 件の笛と祖父忠盛笛の上手にて
鳥羽の院より下し給ふれたりしを經々相傳
せられたりしか敦盛笛の器量たるに依りて
持たれたりけるとかや名をば小枝とぞ申し
ける

千種日記 須磨寺に敦盛の寫眞と青葉の笛
あり「うつし書云々」と庭田中將の題玉ひ
は是なり又青葉の笛寒竹の笛を包し袋は蜀
錦なり

遊方石所略 青葉笛天下三管笛隨一也薄墨
笛義經所持蟬折笛高倉院茂仁親王所持其笛
素質似蟬節半折故名蟬折青葉素質無筋又蒼
竹笛此小笛也

本朝俗誌志 青葉の笛一管歌口のうらに笹
の葉のやうなる葉わと近きころまで色青か

りしと云へり生の葉にてなし彫物也

寺説 當山の寶物は貞享年間正府寶藏寺よ

り胎納せり

常山東行筆記 今須磨寺に敦盛の笛として傳

へたれども笛も父經盛の方へ送り返りける

事盛衰記に見へたれとあらぬ贖物にそ有へ

死

攝津微書 經盛唐土より漢竹を取寄せ比叡

山にて三七日はを祈られ作りたる笛成と諸

書に出たり此須磨寺の笛を見るに和竹也又

鐘を見るに大將の着せし鐘なる事覺東な

一の谷落城の時青葉の笛焼失したる成へ

青葉の笛の眞偽のはと右の諸書に徴して讀

者自ら判斷し得む尙くさくは寶物あれと開

帳の時ならては許さぬとかや

辨慶の鐘

本堂の西にあり鐘かけ松のくさりに記るせる
鐘はこの鐘なりと云ふ銘に攝津矢田郡丹生

山田庄原野村安養寺とあり

諸國里入談 鐘樓の鐘すくれてちいさし銘に安養寺とあり須磨寺のもとの寺號あるやと尋ねしにこれは三里ばかり山奥の寺也壽永の亂に武藏坊かの寺の鐘をとりて陣鐘にしけるよしにて今當寺にとまるといふ手ごなる釣鐘草やつはものゝ 沾 涼

渡邊林菴

編出梵宮餘韻長、遍通萬戶散悠揚、驚回殘夢動人事、冥路亦應安李王、

若木櫻

本堂よど石階を降りて右側にあり
千種日記 寺の前に櫻あり須磨の若木の櫻是なり

所歴日記、西須磨を過きて上野山福祥寺に參る若木の櫻も此寺にありとてあるへの教へ侍りたる立よりて見侍り奉れば竹の林の中になん有る須磨の關屋のとよめしをた

もへい爰にはいかゞとれもへ侍る

本朝俗誌 若木櫻上野山福祥寺境内にあり幹は朽て根はかり方三間程にはひこれと廻りに垣をむすふ也其株より梅のすはへのこと、若生きもとも生たり古へより若木の櫻といへは其幹久しきむかひ朽たるなるへし今とても少おいたての必朽る也されはいつまでも若木の名はひまゝからず目出度さくらなるへし

遊方名所畧 八郡郡須磨寺及山岳有若木櫻寺中櫻花別得名老樹又如若故名

名所方角抄 磯馴松若木櫻蟹のり松の柱竹のあ光る垣石の橋源氏物語の詞あり

遊藝勝記 須磨寺に參詣すれば若木の櫻花は散果て後の山は草茂りぬ

敦盛の首を義經此寺に埋めたるより辨慶憐み其名を後の世に傳へんか爲に櫻を植へて若木櫻と云へりとの俗説あれとも名所方角抄にも云へる如く源氏物語代言葉にもつき植へお

きしこと疑ひなし

源氏物語 すまに年かへりて日なかくつれくあるみうへしわか木の櫻はのかにさきそめし空のけまきうらゝかあるによろづのことればいいてられてうちなき給ふありく多かり二月廿日あまりいにし年京をわかれま時心くるまかり一人との御ありさまなどこひまゝ南殿のさくらにはさかりになりぬらん云々

忠度と腕にもかへりさくさ哉

花咲と聞はさくらの哀れかな

櫻花たか世の若木ふりすてゝ 定 家

須磨の關屋のあとうはひらん

花さくら老かはれども植初し

むかしの春の色もわすれす

渡邊林庵

英々繁々厭枝垂、想見江南万玉妃、名入倭

歌長艶麗、風人千載寄幽詞、

何 禮之

一指要賞花一枝、豪僧軍令太清奇、風流欲比廣平賦、鐵石心腸護艶姿

攝津微書 忠度の行くれて木の下かけを宿とせと云々の歌は旅宿といふ兼題の歌あるへし此花の許にあつて讀みたるにあらず

嫩木櫻制札

須磨寺櫻

此華江南所無也一枝於折盜之輩者任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指

壽永三年二月 日

攝津名勝圖會 此花江南とて梅の制札也詩話曰在江南寄梅花一枝詣長安又云江南何所 在聊贈一枝春又云北人江北望不見隴頭梅、然る時は此制札と旅梅杯にありたり若木櫻の制札といふと辨慶の大ひなる類なるへし又所無も所務あり辨慶は三塔にての博識たる人に似合さるへし

攝津微書 一の谷落城は壽永三年二月七日

なり何と櫻の花咲くへき時節みあらず謠に出せる故俗誤れり又辨慶か制札を見るに此華江南所無也云々此花江南の所無となれば是櫻にあらず梅に立るの高札なり又曰薩摩守は平家代大將なり寵愛の櫻源氏方の武蔵坊辨慶なれば一枝をさらは一指をさるへしといふ高札をなんぞ立へき理あらんや俗語誤れり案するに境川の西播州の分に梅か鼻といふ所あり此地甚名物にして二月七日の頃なれば梅花は盛なるへし辨慶此梅か鼻の梅に立たる高札成へし故に此花江南の所無と書り此制札須磨寺にある故若木代櫻の高札などといひ傳へしか甚非なり然れどもかく改む時は風雅なし

辨慶の筆を殘せり
諸書斯の如く辨慶を非難し或は辨護せりも辨慶代筆にあらずといふ然るも四五年前史學會場に於て重野安繹氏は辨慶と題し左の如く演へらる
彼の腰越狀代如き若木の制札の如きと其れ擬物たると已む故人の定説あり
編者は其の質向をなせしか史學雜誌第四十一號の紙上に於て同博士は解答に接しぬ第一新編鎌倉志鎌倉攬勝考十新編相摸風土記稿百五平泉雜記二等より例證を掲げて今腰越村満福寺に存せる腰越狀は辨慶か筆にあらざることを明かにし次に前に載せたる攝津名所圖會の論難洩かへけ終りに
平泉雜記四
辨慶筆跡
攝州須磨寺の寶物の中より辨慶か筆跡として古き制札あり、其文章に曰
此華江南云々下略

壽永三年二月二日

一書に辨慶は廣才みして智慮深し、行狀みな人知れり清貧にして今に殘れる文書多くは鐵馬具等迄借用る代狀也
鎌倉實記の作者評辨慶曰辨慶か武勇天下後世に至て童子婦人まで辨慶と稱す此亦其實なきと有へからず然共義經起兵の初より今日に至て辨慶か勇力武功の事實を記きたる實録を見ず博識は人を俟て可散疑也
これば櫻の制札あると梅の制札なるとに拘とらず誤字の非難も還つて博識の辨慶か筆みあらざること或證するものとなるへし

上野

須磨寺の西東より鐵柵山の麓まで代田野みして月見の臺の名ありと傳ふれと諸書を按する時は内裏跡の邊を上野と云へるものゝ如し
須磨記 上野の岡といふ所何かまほ寺あるよし云々

須磨名所記 一の谷二の谷の間に平家諸勢こもれり爰を須磨の上野といふ

所歴日記 二の谷の間二町餘此間道より十間程上は皆野なりさす鳴也と讀し須磨の上野爰あるへし
承應四年記 一の谷の間に平家の軍勢屯する由此所須磨の上野と申さる
遊方名所畧 八部郡須磨上野有傍馴松里南濱也云々又須磨後山前海其中之里云上野又行平所遊上野里也
攝陽詳談 安徳天皇遷幸陣所須磨上野の地にあり
攝津微書 内裏跡は須磨の上野あり
攝津名所圖會 須磨の里乃山岨みある田園をいふなるへし又内裏蹟代項みこも須磨の上野といふ
攝州名所巡覽圖會 須磨上野かみの野一面乃名あり
建武は戦には足利直義此地に陣せしは太平記

兵庫海陸寄手は章及び正成兄弟討死の章を見て知るへし

去程は明くれば五月廿五日辰刻に澳の霞の晴間より幽見わたる船ありいさりに歸る海人が淡路の迫戸を渡る船かと海邊の眺望を詠めて鹽路遙に見渡せば取梶面梶に極精掻きて艦舳に旗を立てある數万の兵船順風帆をそ擧げさりける煙波渺々さる海面十四五里か程に漕ぎ連ねて舷を轆り轉舳を雙べれば海上俄に陸地に成りて帆影に見ゆる山もあしあなればたゞし吳魏天下を争ひし赤壁の戰大元宋朝を滅せし黄河の兵も是に過ぎまど目を驚いて見る處又須磨代上野と鹿松岡鶴越は方より二引兩四目結直達左巴倚せかゝりの輪達五六百流差し連ねて雲霞は如くみ寄せかけたり海上の兵船陸地の大勢思ひしよりも霞くして聞きにも猶過ぎされど官軍御方を顧みて退屈してと覺えける(中畧)

左馬頭の兵ども菊水は旗茂見てよき敵なりと思ひけれと取籠めて是を討たんとしけれとも正成正季東より西へ破りて通り北より南へ追ひ靡けよき敵と見るをば馳せ雙べて組まゝ落ちては首をとり合はぬ敵と思ふをば一太刀打ちてかけちらす正成と正季と七度合ひて七度分る其心偏に左馬頭に近き組んで討たんと思ふあり遂に左馬頭の五十万騎楠が七百餘騎に懸靡けられ又須磨の上野は方へぞ引返さける云々
波かけぬ須磨のうへの露にたに 淨海法師
猶しはたるゝたひころも哉
鈴舟のよする音にや騒くらん 顯昭阿闍梨
須磨の上野にきゝすなくなり
風早み上野は尾花をきふすを 上 總
須磨のうら波たつかとを見る
月にふけ須磨の上野の秋の風 似 雲
尾花のなみにけゝくうらなみ
熊谷 荔齋

野開一面接天長、千草競榮生露香、風度自南吹彼綠、炎雲消卻逸懷涼、

後山

上野より北の方青谷高倉柴山因幡を唱ふる山々を總稱して後の山といへり
遊囊勝記 須磨寺に參詣すれば若木の花と散果て後の山と草茂りぬ
攝陽群談 因幡山の項に民家炊以て一名後の山と稱す行平卿の配所に准へ世俗松風の謠に寄て號之或は月出る後の山など須磨の庵に結び讀める歌を取て歌の名所とす其證不詳凡て山の前み居ては直に山の後とするものか遠山松は項に因幡山後の山などと云も此邊にあり
源氏物語 煙いと近くときく立くるをこれやあまの鹽やくちらんとたはしわたるはたはします後の山みはといふものふするなりけりめつらかにて「山ははのいはりに

たけるまはくもとゝひこかんこふる里人に攝津名所圖會 上野より北手の山を凡て後の山といふ土人の稻葉山といふも此中にあり月出るうしろの山は雲はれて 家 長
須磨のいはりにかへるうら風
問人のおもひよかしと柴菴の 爲 尹
うしろの山にみちつけてけり
此歌一書には「柴の菴の」「みちつきにけり」とあり
熊谷 荔齋
前水後山歸路遐、翠嵐掃跡日將斜、樵蘇自樂風流事、秋憩楊林春坐花、
馬 塚
上野新池の西にあり近年まで小丘の上に薩摩守忠度愛馬之墓と刻いたる石標ありし由なれと今は其跡詳かならず
綱敷天神社

千森川より二町餘り東に老ひたる松の林ある所なり天神社の西字下宿の社は東向諏訪明神を祭れり又境内の東の隅に松の切株あるは天神松なり

須磨記 淡路島もはるか見わたるゝにこや走らせし舟も須磨の關近ふちかつきてなん浪山をおこしくしらなといふうろくはのかさもまゝみわらこれぬへくおどろくうかみなりてさ川此浦にとからうきてくはいかりといふものをさへいけちとされてあやうさとたどへーなり爰にけさぬる日ははや夕日西にかゝやくとしも侍らねどもぢみのひかりもはれぬくやうなれば云々
攝陽群談 綱卷天神社須磨村にあり祭神菅公也筑紫に向ふ時此濱に於て船を留む漁者船人纜を曲て遷座なさりめ暫く當浦の景色を令見となり時の人其神像を寫し祭を綱卷天神と稱す今の世に畫工の所作因之云々

攝州名所巡覽圖會 綱敷天神所々多し攝津名所圖會にて綱卷天神綱輪天神の名ありと見ゆ

天神松

攝陽群談 須磨村民家より南海西の方森の中にあり俗傳云く菅家筑紫に遠流せらるゝ時此濱邊に船を留め風波の難を凌ぐ纜を此松の下に曲て坐する事暫くあり仍て以て天神松と云ふ其後夜々に海中より燈を捧ぐ此故に一名龍燈の松ともいへり
今は影向の松とも傳ふ龍燈の説と筑紫より附會せるものあるへい
家集に陸子の繪に須磨の浦の歌書たるに神社に寄て行浪の高ければたよせろ御てくら多く祭る所を讀める
たよ世とと思とさらなん滄海の 慮恵法師
祈るまゝろと神を知らん
白波の色にみまかふみてくらを 同
たよせにうけよ神のまのかみ

現光寺

千森川の東街道の側ら一段高き地みあり直井元介氏の手記を見るに
康永二年大内侍人紀州日高城主湯川安藤守族將監教方者授於本願寺第三世主覺如上人化剃髮染衣住此村焉蓋父之舊地也乃於光源氏藩架建立小宇號勸堂因是本願寺嗣南無阿彌陀佛一幅曰永以爲本尊焉其後永正十一年始稱中興僧淨教繼之云此歲地大震勸堂破壞始移現光寺以爲寺號云 又天正七年瀧川一益贈井戸之庄建禁札於此寺云々 或傳往昔稱聖源寺寛政九年改聖源寺爲現光寺閏七月廿七日使僧了璋入于此寺云々天保四年遂逝丹治了教繼世以至今也云々貞享二年門徒清左衛門孫左衛門再建之云々
須磨名所記 光源氏の配所の道よりすこし北は方と云傳ふ
名所方角抄 源氏の住玉ひし所は宿より南

海さわみうちあかりたる所あり宿を西へ濱に出れと南み岸の高くある跡也

攝陽群談 光源氏舊亭須磨村にあり俗傳に云く光源氏の君須磨明石の景色にまとい暫く爰に春秋を送り給ふの古跡也と云へり源氏須磨明石の巻に因る歟其證不詳
遊方名所畧 醍醐帝皇子右府光源所住里南海濱西高岸是也
續後拾遺 源氏の住玉し所は宿より南海際に打騰りたる所たり宿を西へ濱に出れは南に岸の高く有所也
遊藝勝記 光源氏の舊蹟は即今の源光寺是なりといふ
攝津名所圖會 按するに西宮左大臣の謫居の地か
右の諸書といつれも源氏物語より出たるものみして同物語の光源氏と西宮左大臣をさせるものなりとは古へより傳ふ所なれば同大臣の跡あるへし側らに櫓跡など云へる地あるを以

て源氏陣所の跡なりと云へるこ非なるへし備
願正住職の時火災に罹りたる由にて建立後五
百五十余年の古寺あるに什物とて傳ふるも
のはた、桶の如く板片を以て合せたる塗太鼓
あるのみ次に記るせる一書を以て直し此寺な
りと云ふにはあらねと聊か疑存するを以てこ
ゝと掲げて讀者の教を俟た

巴戟天主人 須磨の源氏寺八犬傳の古跡な
どはいかみもありなん身大臣の貴き上り
國家の重きに關したるを考へす一時
代便宜に之を抹殺するか如きは祖先と對す
る吾人の義務を失ひ國家の長計を考へざる
と甚しと云ふさるへからず

似雲風月庵跡

同寺境内本堂の右に方り近年まで似雲の寓せ
し風月庵ありし由なれと今は石ふみを建てし
舊趾を表せり其の碑のうらにいけこもと云々
の和歌あり一書には此庵もと上野にありしを

須磨に關屋跡

現光寺の邊を藩架と云ひ道を描ひて南に一堆
の臺あるを檜跡と云へり此邊より關守神社の
地までを關屋跡と云ひ傳ふまゝ所傳に今路傍
に建てある石碑と三四十年前現光寺の裏より
堀出せし由此石碑を見る一面に「川東左右
關屋跡」と記せりまかし關屋跡は東西の兩説
ありてこれか爲に攝播の境をも誤れるとは須
磨の位置の項に記るせとも兩所何れか是なら
むた、諸書を掲げて讀者の參考に供ふるのみ

紀聞集 三十七代天智帝時置四境關鈴鹿關
在近江伊勢界逢坂關在山城近江境龍田關在
大和河内境須磨關在攝津播磨境
攝津名所圖會 延喜式出古跡源光寺の西街
道の左右に一堆の臺ありこれをいふ(上野
圖書館の延喜式に欠本あり關屋の項見當ら
ず尙ほ三版を期して記載すべし)
所歴日記 關屋の跡と云ふ所二所ありちも

此に移せるものなりとあり似雲は廣島の人也
和歌も長し天下を歴遊するを以て樂みとせま
は今西行の結名伊勢桑名の海と和歌を讀みて
難を免れたる一話に依て明かなり延享四年の
頃此浦にありて鹽濱の再興を謀りしかといく
はくもさく又もしはの煙絶へたれば身にそま
ひまたこり須磨もやく鹽の煙りもたへし跡の
浦風と詠して此浦を去りしか墓は河内國弘川
にありとそ

芭蕉翁句碑

同寺の門前あり裏に見渡せばなかわれり須
磨の秋の句をゑるせり豊後の俳士芳羅坊の建
てたるものなり芭蕉は此里に來りしは四十五
歳の頃と思はる

橋本海關
道衣通世送餘生、隻字微吟善寫情、誰識芭
蕉秋夜雨、古來滴作一家聲、

り川の東道より南と鉄柵峰の下なる山と也
海路の關なれと浦近き所なるへし

顯昭阿闍梨 攝津國播州境關はあれと須
磨は攝津の國の方なり
名所方角抄 須磨は關屋といふと今はこり
まのうちと見へたり歌にはた、須磨あり
遊藝勝記 須磨關は其興廢史籍所見なし唯
和歌に因て其梗概を知るはみ今の關屋村な
と云ふは其名の遺れるみや又爰と關屋の跡
とはかりいへど此頃は荒たる板屋たふなく
まいて守人もなかりき

攝陽群談 須磨關矢田郡須磨村にあり
遊方名所略 須磨浦東西二里間其西際古有
關所此云須磨浦關
須磨名所記 須磨の關屋は跡濱須磨と西須
磨の間川あり此川は西北の方に在り
攝津志 西須磨村龜延喜式關趾尙存
須磨の月

此浦は遊方名所略に云へる如く天下風月勝地なり中秋の月を賞せむとて今も尙ほ兵庫神戸若くは大坂京都よりわさく来り遊ぶもの數えれす月見臺の名ある上野の臺に登りて眺むれば盆大の月は波間より湧き出ていど廣き青海原も残る限なくさらく黄金を散すか如く淡路島わたりに浮へる小舟までさやかみ見ゆる景色の幽秀にて清麗なる石山田毎などの及ふへくもあふす紫式部は石山寺に籠り中秋の月湖水にうけりたるを見て水想觀を成就し自然智を得て源氏物語を作れる時須磨明石の巻より筆執り始めしとなりかくも此景の式部か心を酔はせり見るを見て其の風光の常ならざるを知りぬへし

詩 歌 須磨の關及び月

事更にま乃一項を設る關及び月の詩歌を併せ記せしは古人既に關屋の間月とて八景は一に數へ古詠亦關屋の間月と題して讀まきたるも

此多くして詩歌を掲ぐるに月と關の二氏に分ち推ければなり

淡路島かよふ千鳥のなく聲に 源 兼 昌
いく夜ねさめぬ須磨のせき守
淡路島くるかみ見つる浮雲も 家 隆
須磨のせきやにいくまきに寄り
はりま路やすまは關屋の板ひさし 師 俊
月もさどてやまはらあるらん 定 家
雪のもる須磨の關屋の板ひさし 定 家
あけゆくけさもひかりとめたり
須磨の海士の馴にし袖も盪垂て 同
關ふさふゆるあきの浦風 同
すまの浦や波に面影立そひて 同
關ふさふゆる風と悲しき 同
宿とらん人にもかくや須磨の浦 同
關ふさふゆる秋はつかせ 同
旅寐する夢路はたぬれまの關 同
通ふ千どりのあけはのゝこゑ 同
須磨のうら若打波の聲はして 土御門院

人を止むる關はなかりき

すまの關夢を通さぬ波は音を 慈 圓

おもひもよらて宿をかりけり

朝思ふ須磨の關路の貸まくら 素 昭

ゆめをはと扱すなみのまゝかな

月澄てふくる千鳥の聲すなり 讀人えらす

まゝろくたくや須磨乃關もり

打よする波も有明乃月さへて 釋 阿

秋やかなしきすまのせき守

山嵐に浦傳ひする紅葉かな 實 定

いかゝはすへきすまの關守

うら通ふあき風淋すまの關 源 通 具

ふさあす浪はかたにけりても

時しもあれ秋の旅寝を須磨の關 沙彌釋 阿

身みまむかせのかへるまら波

忘れなん思はしとすれとほまた 賴 範

須磨の關屋の秋かせの聲

關の戸を雪より明て須磨のうらや 堯 尋

猶雪ふかしあは路しま山

秋は尙すま乃關路の夕まくれ 藤原季景

うらふくかせのあみのおとまで

影供歌合 關守のまたひとへなる衣てに

いあくなふきそすまの秋風

もしはやく烟も霧に埋もれぬ

そまの關屋の秋の夕くれ

須磨の浦關の旅人とまるまで 讀人えらす

なみありかへる夕あらし哉

旅人は袂涼しくなりにけり

關ふさふゆるすまはうらかせ

一條兼良は花鳥餘情に關吹越る須磨の浦風の歌は壬生忠見か集し侍るなり行平中納言の歌の由此物語も載たりけるを續古今に源氏に本流記即行平の歌と入たり儘なる忠見か歌にて侍る○源氏物語 須磨にはいと心つくしの秋風は海は少く遠々まで行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦浪よるくは實みいと近く關へて又なくあれなるものはかゝる所の秋

なりけり

月澄てなきたる海のおもてかな 西行法師
 雲のなみさへたちもかゝらて
 月宿るも一得の袖を人とは 源 通 光
 わふとまたへよとまのうらなみ
 夜を寒みすまの入江立千鳥 公 猷
 とくさへ氷るつきになくなり
 和田の原すまの浪路を見渡せと 經尹朝臣
 うらつたひして月もやとゝる
 消はてぬ須磨のもしはの夕烟 前 座 主
 月みうきさあわだけうらかせ
 月ならてすまの關もる友うなき 寂蓮法師
 まごしを過そあまのつけふね
 假初に關もるよは乃寢覺まで 同
 そてふれ なる須磨のうら波
 爲尹卿千首
 月陰のすまの關路にあくかれて
 ちか／＼人やとまらさるらん
 昔より須磨の關守せきとめて 龜 山 殿
 あきは月夜のなかさなりけり

内裏名所百首
 もしほくむわたりの空の月影に
 茶むりをとめよ須磨の關守
 同
 月もれ風も戸叩け須磨の浦は
 あれたる關屋あきみまかせん
 爲忠首
 雲井より歸る雁をは止めねと
 我ためかたき須磨のせきもり
 同
 なのりて古里へゆく雁かねを
 ちとかどめぬすまのせきもり
 俊成五社百首
 聞渡る關のちかにも須磨の關
 名をとめけるなみの音哉
 最勝四天王院隆子和尚
 もしほやくすまの關守我からに
 なほおもひそふ秋乃もふくれ
 同
 朝なきに習はぬ波に夢も見す
 なれちはいかみすまのせきもり
 心なき蟹とちともすまの浦は 權律師兼親
 もしははやかて月をこそみめ
 須磨のうらや鹽くむ蟹の袖にのみ 邦省親王
 よか／＼やとる月のあけ哉
 爲家卿千首
 浦磨路の須磨の關屋は荒よしを

板間の月そひとり漏りぬる

師兼卿千首
 すまの蟹のもしほの烟り立登り
 内裏名所百首
 月もまどをの袖の秋風
 すまの浦蟹の戸渡る雁かねの
 まるすまのはるいさよいの月
 同
 久のたの月澄ははすまのうら
 あきな泥なみに秋とみえける
 同
 すまのうら鹽くむあまの衣手に
 濡くそやとるありゆけけつき
 同
 月影を秋とやのこつすまの蟹の
 鹽くむ袖の波にぬれても
 同
 秋よまた月に幾度もしはたき
 たえぬなかくも須磨のうら人
 同
 すま乃浦は蟹のたくなは暮行と
 人とのためす月を待てる
 最勝四天王院隆子和尚
 すまの蟹の下たれ衣うちはて
 来てこそとみぬ波の月あけ
 同
 定めなき心一つをすまのうら
 月みいてたるあき乃あま人

あきの夜は重て袖も朽やする

同
 月をのみ見る須磨の浦ひと
 須磨のうらまな雨あかす晴に見
 月は西へもいらぬ物也へ
 人こふる我眺めよとおもひ見 大 乘 院
 須磨の關屋はあり明のけき
 浦つたふ月は明石の空はれて 藤原忠 貞
 なみみあきふく須磨のまはかせ
 月は／＼や遠島影にかたふきぬ 永福門 院
 ・まはしとめよすまのせきもり
 ちかめやる心いつくに通らん 藤原公 經
 もろこいまでもすまの月かけ
 呀ははる須磨の浦はの冬の月 家 隆
 關はもしはのけむりぬになし
 すまの關波風寒みそよ千鳥 俊成卿 女
 ふけゆくけ泥にこそうらむあり
 須磨の浦に秋を止せぬ關守も 藤原信 實
 のこる霜夜の月とみるらん
 及まの浦や蟹とふ雲の跡晴て 後堀川院 女 房

なみより出る秋の夜は月 幾歸りそまは海士人我ための 爲家卿女
 あさとはあし月をみるらん 月すまはあに過行人もあらし 實持朝臣
 こよいとたの先須磨のせきもり 和田の原八重の汐路は雲消て 兵部卿有教
 月すみのほる須磨のうらかせ あきの夜はすまの關守すみかて 通成
 月やゆきよけ人とよひらん 久方月夜に夜船もいてやらて 沙彌禪信
 なみふきよするすまはうら風 すまの浦や遠き汐路の波の上に 源資平
 明かたちのくやとる月か茶 すまのあまのまは汲袖宿る月 關白
 はてはけふりけくもるなりけり もしはやく煙をすまの浦人や 大僧都義親
 みるめも月にまを成らん 月ふら花煙をまたやらすまは 前大僧正義
 海士のしはさももーはやくらん

鹽けむり思てぬ方に曇ら一な 沙彌春譽
 なひけと月のすまのうら風 かたみとて残す鏡をすまのうらの 釋正廣
 波より出す秋の夜は月 月宿るもしはの袖を人とは 源通光
 わふとこたへよすまのうらなみ 人の世は幾代變りてなみなれむ 直繁
 月とむかーもすまのせき守 すまの浦や蕪鹽の煙り風はら 直家
 ・ なひくにくもる關の月影 外とーも明石の名をはしらしかし 隆信
 月にこころをすまのうら人 はりま瀉すまの月夜の空さめて 前參議親陸
 繪島かさきにゆきふりにけり さまくの虫の音高く月さて 何多仁子
 必すしきすまのうみへや わや錦たり出すかと思ふまて 同
 月影きよきすまのうらなみ 書くともれよはー秋の月影に 同

あやたり出すはまのうらなみ 月の照すまのまさこを踏分て 同
 きよきことほはのたまをひろはん 歸るべき時は來たれとすまのうら 同
 月にこころのこりぬる哉 松の葉に置たる露のまらたまを 同
 けきの取とおもひけるかな 松風に雲はらとせてすまの浦 同
 ひかりをはなついでさよひの月 すまの浦ちりも曇ぬ月かけに 同
 おきの小舟の敷をまらるゝ すまの浦月の夜さの景色をこ 同
 いひつくすへきとのほもかな 見る内に月沈みけりすまの雨 關更
 名月に旅たつ人はすまへかな 中くの景色と茲そすまの月 同
 後の月すまより人の歸り來る 松影を離れてひろし月のいと 露城
 浦ひとは寐たり靜に月のすむ 同

居所のすまも忘れてけふの月 同
 關屋跡 いと際や案山子もたぬ砂島 同
 梁川星巖 六幅高帆十八洋、舟師乘夜大怒忙、須磨明
 石佳風月、枉付蓬窗夢一場、 藤井竹外
 行遊攝山望播山、食程夕過亂松間、一聲漁
 笛不知處、月白須磨灣又灣、 渡邊林菴
 月滿江村風浪收、皎然心境別清秋、秋光底
 惹征夫怨、說無短蛾解旅愁、 北條霞亭
 往事悠悠何處尋、不知人世幾昇沈、須磨關
 外秋宵月、一片清光千古心、 丹羽花南
 村墟人定砧聲起、沙步禽呼波響幽、誰知須
 磨今夜月、天涯孤客不禁秋、 丹羽花南
 夕陽吹恨落微波、村雨松風夢影多、水佩蕭

々人不见、消魂月上古須磨、

卓 齋

夜色茫茫不見山、水禽鳴度海雲間、客心寄
在一痕月、舟泊須磨茅幾灣、

氏名不詳

前是滄溟後是山、須磨晚景海雲開、思往
昔流遷客、暫爲明月來此浦、

何 禮之

老樹陰森野寺隣、漢關遺跡已成陳、沙禽掠
水鳴寒夜、無復戎樓款枕人、

深井飯山

滿目江山望欲迷、興亡一夢轉悽々、最憐明
月無今昔、又照征帆向鎮西、

須磨の隠江

所傳に現光寺の西北の田圃を指して隠江の地
なりと云へと今審かにしる由なし

攝陽群談 須磨の入江須磨村にあり海浦に
同し隠江同所的一名とするか

攝津名所圖會 古跡源光寺の西にあり今は
田圃となりて名のみ残れど

浦海と同じきものとせば古へはこの邊まで入
江なりしなるへし

万葉 江に生る浮草

こりすまの隠り江に生る浮草
うき身にものをれもふまろかな
六帖 江に隠なくさる浮草の
こもり江に隠なくさる浮草の
きなくと人はこむしかりける

千森川

關屋跡の西の小川にして源を青谷山より發し
東須磨の境を流れ字須磨寺門前に至り高倉山
の流れと合してこ、に流る渡せる石橋を關守
橋と呼ぶ末流の橋を路守橋といひし由ひかし
濱須磨中須磨と云むしは此川を境とせしなり
壽永の戦ひに一の谷城之此川を外壕となし一
の谷を内壕とせり云々川の北の小高き岸を橋
跡と呼へると當時東門の橋跡なり云々又傍ら
の字新田は文祿年間に埋めたる處にして其の

東の端は鹽濱の蹟なり云々の所傳あり併せて
こ、に記しかきぬ

播州名所巡覽圖會 遵羅川須磨山淵より流
る、關屋舊跡西にあり其由縁をしらす

所歴日記 ちもり川

攝津志 遵羅溪

遊藝勝記 乳守川

攝陽群談 通盛川此所壽永年中に戰場たる
を以て越前三位通盛の名あり土俗上略して

血盛川と稱す

攝津名所圖會を見るに千鳥路守關守と書し兼
昌は淡路しまのよふ千鳥云々の歌に基き千鳥
川眞なりと云へり今と千森と書けり或と千守
と記す

磯馴松

この浦の濱松をいふ

攝津微書 となれ松とは磯馴松の畧語なり
名所方角抄 となれ松は里より南濱邊に有

之

遊方名所畧 傍馴松八部郡須磨上野有傍馴
松里南濱邊也一云形見松一云舊蹟松行平左
遷時二妾一號松風一號村雨此須磨浦蛭女也
行平寛平五年卒後二女追念不止掛形見物於
此松常見之故云爾於今存

遊藝勝記 磯馴松といふに總して此磯の松
也又俊頼は須磨に浦や渚に立る磯馴松下枝
と云々里より南濱邊にあり

本朝俗話志 磯馴松と一木とあらず此浦邊
の惣名也是も行平卿の歸洛をおしみて枝葉
みな東へ垂れ幹また東へかたふきたり

攝陽群談 東尻池村にあり並木の松を總し
て云へり行平卿須磨に配流せられし時愛せ
らるゝを以て抽馴松とも云ふと云へり

須磨寺開基記 行平臨別手栽松樹以志之日
磯馴松至今猶存焉

播州名所巡覽圖會 磯馴松は何れにも磯に
馴たる松をいへり此所に限る可あらす

この外攝津名所圖會も攝陽群談と同しく廣
異記より出てたる牽強の俗傳を載す片見松袖
馴松など云へるは衣懸松といへると同く謠曲
よと出てたるものなり

すまれうらや渚に立る磯馴松 俊 頼

まつねは浪の打ぬ日をなき

須磨のうらや磯邊れ松も萎き宛 少兵衛督

猶よせまざる五月雨のころ

松か枝れ千歳をまたて枯に鬼

それもつねなき風や吹らん

面影を月に残して須磨の浦や

夢路もるさぬまつかせれこゑ

渡邊林菴

松頭逸韻即笙簧、海若泛兮仙鶴翔、自是清

風存大雅、正聲今尙不微茫、

何 禮之

松青沙白幾灣環、十里晴波鷗夢間、歴々人

家歸指顧、夕陽斜照淡州山、

滿潮や瀟とつかみあふまつのかげ

村上帝社

千森川の西側にあり

攝津名所圖會 土人云昔大政大臣藤原師長
公は琵琶の達人以て渡唐し妙手を得んとて
絃上の名弦を携へ此浦まで來り給ふを村上
天皇梨壺皇女は靈魂現れこれを止め龍宮よ
り獅子丸といふ名弦を捧げりかここれ以て
天皇より妙手を授り入唐をどまり賜ふと
なん絃上といふ謠曲は趣を諺にいひ傳へり
其證詳かならず

金剛作の絃 絃上といへる謠曲より出てた
る事明けし但し梨壺の女御とは村上帝の女
御芳子の事にして宣輝殿の女御と呼ばれ琴
の上手ありし由は榮火物語などに見ゆと
梨壺に住し事は物に見へず作者は誤りなる
へし又絃上は玄象にいて獅子丸青山と合せ
て三面は琵琶唐土より相傳せし由は平家物
語にくわし今松は切株あると枝葉南にけみ

向へる奇しき木なるか故に片枝れ松と唱へ
しもれにて別に故あるにこあらす社の後ろ
に塚あり名は獅子丸の塚とも又師長れ塚と
も云ふ

關守稻荷

村上帝社れ西の路を北に登れば老松の茂みか
中にあり此邊を字下澤と云ふ往時は此里れ鎮
護社なり矢張此處も關屋跡れ地なりとて關守
稻荷れ名あきと今はたゞ稻荷神社と云へり已
日稻荷の所傳は源氏物語より出てたるものな
り

蛇 窟

稻荷社れ側にあて古へ里人れ穴居せし處あり
と傳ふと信するに足らず

攝津徴書 口廣八尺幅八尺奥入る事六門
是より穴小さく成り凡三尺四方にして其深
き事二里にかよひ播の境田井れ畑村へ貫通

り是を蛇穴といふ然きとも古へ誰人か退治
せしとも聞す案するに若銀を堀りたる跡な
らんか

轡もとらん雲れ峯の色

今は此奇談を説くもの絶てき

寐 覺 菴

西須磨本道より上野にあある半腹に在りて最
眺望に富り今れ菴主露城翁れ設けらまし正風
俳諧の一道場なり其の建築の様此浦に適切を
ると他に比を見ず翁姓は瀬川名は正夫夙に俳
諧を以て世に顯れ今や文學界に於ける一方の
勇將ある事は普く世の人の知る處あり

八 本 松

西須磨の西の端の字なり古松數株街道の傍に
ありひかしこの松の下に八文字茶屋となん呼
へる店ありしと云ふ(今の新田平次郎氏の祖
也)これによりて西須磨を三分して烏池より

千森川までを中須磨千森川より小天井川までを濱須磨と云ひし時は小天井川より西を茶屋と呼へりと傳ふ彼れ彦山權現に京極内匠か吉岡一味齋れ娘お菊を下男友平東須磨に駕籠やどひに行客るあとして殺せしとはこの所にての事ありと云ふ定かからぬことなれと里人れ所傳なればこゝに記し置きぬ

一 一谷

一の谷川は北の方字上野より發して字一谷を経て海に入る常に水を見す
須磨名所記 一谷長さ四町餘横二十間高さ十二間餘但しこれはのり七間ほどあり
(諸書皆を同じければ省畧す)
遊藝勝記 一の谷地勢させる險阻にはあらず但壽永れ昔しは其榛莽幽僻極て鑿平れ今日に異あるへきのみ
承應四年記 一の谷れ間に平家れ軍勢屯する由此所須磨の上野と申なり又二の谷又二

町程過て一谷谷なり
東鑑 壽永三年二月四日癸亥平家日來相從西海山陰兩道軍士數万騎搆城郭於攝津與播磨之境一谷群集云々
平家物語 一の谷れ城郭と申は北は山屏風れ如くに立て入違ふ間に山の懷抱弘く西は大藏谷口狭く山際の岸高き所より南れ海遠淺にて大石を疊大木を寄て逆木に曳深き所に大船を摸合搔楯をかき五所に高樓を構へ西南れ海に大船二艘を浮めて時々組樓を揚て砦れ物見と定む
遊方名所畧 一谷鳥崎一里鳥崎攝州播州境也昔平家城郭跡又一谷者北山南海口狭奥廣岸高如立屏風
西遊日記 抵一谷又有二谷三谷此間皆平氏古壘也

内裏蹟

塚れ間や雲の上野の天津雁

一の谷の右れ上に老松數株ある所を云ふ四方廿餘間の處は今もなほ土地高く老松立並びてその遺跡存せり昔は五百餘坪免租れ地なりしと云ふ
千種日記 三谷を過る左の山に安徳天皇の内裡れ舊跡あり道より山に上てみる東西三町許南北二町餘の程平らにして築地れ跡井の跡所々に殘れり其東西七八町の間古屋敷の舊跡あり
承應四年記 一の谷二の谷の間山れ平地に内裏屋しきあり皇居並に陣屋廿四間四方程土手れ跡あり
攝陽詳談 安徳天皇遷幸陣所須磨上野れ地にあり陣屋の威儀方廿四間餘封疆れ古跡今にあり
攝津名所圖會 内裏蹟一谷の上にありまも須磨れ上野といふ古松二十本計ありて不毛の地なりこれ一谷の城墟にして安徳帝行宮と一給ふ今方廿四間計官家より租稅免除

の地也と云
平家物語 落足れ事 (上畧) 凡東西れ木戸口
時移る程にもなかりしかは源平數を盡きて討されにけり櫓れ前逆木の下には人馬の肉山の如し一谷小笹原緑の色を引き替へて薄紅にそなりにける一の谷生田れ森山れと海の汀に射らき切られて死ぬるは知らず源氏の方に切りかきらるゝ首とも二千余人なり今度一谷にて討たれさせ給ひたる宗徒の人々には先づ越前の三位通盛弟藏人太夫業盛薩摩守忠度武藏守知章備中守師盛尾張守清貞淡路守清房經盛の嫡子皇后宮亮經正弟若狭守經俊其弟大夫敦盛以上十人とを聞けし軍敗れにたれば主上を始め參らせて人々皆御船に召して出させ給ふこそ悲しけれ汐に引かれ風に隨ひて紀伊の地に赴く船もあり蘆屋の沖に漕き出て波に揺ぐるゝ船もあり或は須磨より明石れ浦つたひ泊さた

めぬ楫枕片敷く袖もまはれつゝ臆に霞ひ春
此月心を挫かぬ人そなき或は淡路の迫門を
押し渡り繪島か磯に漂へど浪路遙になきわ
たり友まよはる小夜千鳥是も我身のたくひ
かな行末いまたいつくとも思ひ定めぬかど
思へて一の谷の沖に休らふ船もありかや
うに浦々島々に漂へは互の生死も知りかど
一國を従へるとも十四箇國勢の附くことも
十万余騎都へ近づくことも僅に一日の道な
れば今度はさりととも頼も一うこそ思これ
つるに一の谷をも攻め落されていと心細
うそなられざる

逆落し

山あちや落せし谷のわれくるみ
承應四年記 岩石落の山と二谷の迫詰とも
云又一説は一の谷の上の山とも申又鐵柵峰
の下に逆落あり此下即内裏屋敷あり
千種日記 鐵柵峰の東の尾上に鐘掛とて老

ひ喚ひ叫ぶ聲は山嵐ひゝかし馳せ違ふる馬
れ音之雷の如く射違ふる矢は雨の降るに異
ならず或は薄手負ひて戦ふものもあり或は
引組み指し違へて死ぬるもあり或は取りて
抑へて首を掻くもあり掻るゝもあり何れひ
まありとも見ぬさりぢりかゝりしかども源
氏大手とかりにてはいかにも叶ふへしども
見ぬさりに七日の日の曙に大將軍九郎御
曹子義經其勢三千余騎越に打ち上りて人馬
の息休めてははしけるか其勢ふや驚きたり
けん牡鹿二つ牝鹿一つ平家の城廓一の谷へ
を落ちさりける平家の方の兵共是遠見て縦
令里近からん鹿谷も我等に恐れて山深うこ
そ入るへきに只今の鹿は落様こそ怪まされ
いかさまにも是は上の山より敵落すにこそ
どて大に騒ぐ處に爰に伊豫に國は住人高市
の武者所清章進み出てゑどひ何者にててもあ
らはわれ敵れ方より出て來りたらんするも
の城通すへきやうな！とて牡鹿二つ射どめ

木あり云々此松と峰との間は義經の落し玉
ふ所也

遊方名所畧 一谷者北山南海口狹奥廣岸高
如立屏風自高嶺巖碎石落故此邊言巖石落
攝陽群談 一の谷より二の谷に至るの間二
町四十間餘り隔て險阻の地世に逆落と稱
す

攝津名所圖會 鐵柵嶺一の谷の峰をいふ此
峰より麓までを坂落し巖石おとしの名あり
義經一谷を攻落されしより名とせり
平家物語 逆落此事
是を始めて三浦、鎌倉、秩父、足利黨には
猪股、兒玉、野井よ、横山、にしたう、鈴
木黨、惣して私れ黨は兵共源平互に亂れあ

て牝鹿は射いてを通しける越中の前司是
を見て詮なき殿原の鹿の射様な只今の矢
一筋にて之敵十人をと防らんするものを罪
つくり矢たうなにとを制しける程に大將
軍九郎御曹子義經平家の城廓遙に見下して
れど一ける馬共落して見んとて少々落さ
りて死ぬるもありさきども其中に鞍置馬三
匹相違なく落つきて越中の前司か館の前に
身振してこそ立ちたりけれ御曹子馬は主々
か心得て落さんにと痛うは損すましかりけ
るそ只落せ義經を手本にせよとて先つ三十
騎のあり真先かけて落されければ三千余騎
の兵共皆續きて落すこそしも小石まじりの
砂なりけれと流れたとし二町許颯とたど
して壇なる所に扣へたりそれより下を見渡
せど大盤石の苔むいたるか釣瓶下に十四五
丈を下りたるそれより先は進むへきとも見ぬ
す又後へ取りて退すへきやうもなかりか

と兵共爰を最期と申してあきれて扣へたる所に三浦の佐原の十郎義連進み出て申えける我等か方よては鳥一つたちてたにも朝夕かやうの所浪と馳せあるけは三浦の方の馬場とて真先駆けて落しければ大勢皆續ひて落す後陣に落すもの、鎧の鼻と先陣の鎧甲にさはるはとなりあまりいふせさに目を塞きて落しけるゑい、聲を去のひにして馬力をつけて落す大方のまわざとは見ぬす只鬼神の所爲と見ぬし落しもてぬみ岡を咄と作りける三千余騎か聲なれとも山彦答へて十万余騎と聞ゆる村上判官代康國か手より火を出して平家の屋形假屋を片時の煙と焼きはらふ黒烟既又押し懸りければ平家の兵共若しや助ると前なる海へそ多く走り入りける渚には助船とも幾らもありけれども舟一艘にと鐘ひたる者共か四五百人千人許籠み乗りたらんにならぬこよかるへき渚より三町許漕き出て目の前

にて大舟三艘沈みにけり後とよき武者をは乗るもと難人原乗すへからすとして太刀長刀以て打ち拂ひけりかくする事と知りながら敵に遇ひてと死すして乗せしとする船にどりつきつかみつき或は臂うち斬られ或は肘うち落され一の谷の汀に朱にありてをなみふゝたるさる程に大手にも濱の手にも武藏相模の若殿原面も振らす命も惜ますこゝを最期と責め戦ふ能登殿と度々の軍に一度も不覺去給はぬ人の今度と如何思はれけん薄墨といふ馬に打ち乗りて西を指してそ落ち給ふ播磨の高砂より御舟に召して讃岐の八島へ渡りたまひぬ

梁田 蛭 蛭

浸氣一抹紫微星、海岸忍留舟翰青、冠蓋春寒風度谷、劍瓊雪暗夜付度、鄧軍蜀嶺九天下、宋王崖山幾月經、赤幟光消空返炤、無人對酒泣新亭、

頼山陽

幕、望裏煙巒舊帝城、鷗地海天風雨起怒、濤髯鬚鼓擊聲、

高橋 白山

海山形勝尚依然、下馬低徊暮春天、湘竹淚寒青葉笛、戎衣夢冷落花篇、王孫遺恨迷芳草、帝子冤魂哭杜鵑、一曲琵琶度平語、榮華說盡二十年、

稻本 陽州

攝山落水々連天、不鎖關門七百年、青葉笛殘人那處、依稀明月照無邊、

一休

萬騎下山源氏兵、平家運盡出堅城、長江不洗英雄恨、日夜風濤戰鼓聲、

梁川 星巖

二十餘春夢一空、豪華吹散海暎風、山排殺氣參差出、潮迸冤聲日夜東、憶昔滿宮悲去鷓、欲將往事問飛鴻、爛斑剩見英雄血、紅樹鵝啼菜々紅、鼓擊聲死鐵沈沙、往々漁人網戟牙、軍壘今爲狐兔窟、僧居曾是帝王家、

播之首、攝之尾、吾視其地何雄偉、山勢北來迫海壖、松柏露根亂蘆葦、怒潮淘沙出白骨、啼小鬼兮哭大鬼、聞說平氏曾此蹶赤埽、塵巖爲城澎湃爲溝、左控王畿右甸服、舊業自期唾手收、何料東人有機智、要害早已被耽視、九郎一身渾是膽、伏旗仆鼓出不意、蜀道雖難不用德、懸崖絕壁如平地、組練劃山訝懸瀑、蹄間三尋眞是鹿、秦宮殿宇從一炬、晉人爭舟指可掬、桓伊弄笛終貽禽、劉琨嘯歌亦遭戮、勝敗有儘少人知、繪畫徒傳娛童兒、一自貂蟬出介冑、上下文恬又武熙、豈知養虎自遺忘、羽翼既成猶守雌、敢忘越人殺其父、白旄一出誰能支、宛如翡翠遇飢鷹、不怪毛血紛離披、獨有武州能捐軀、婦人群中見丈夫、吁乎諸君皆能學之子不將寶劍附天吳、

小林 至靜

廿餘年夢鏡浮榮、豈留三公與九卿、歌詠何曾資治國、騎奢終是忘修兵、史中豪傑今邱

骷髏有眼何能識、草木有情也自花、欲把一盃聊酌汝、幾行哀淚落烟霞、

鶴飼石齋

平公曾此擁先皇、十萬軍兵不可當、後時丹崖乃天險、前廻蒼海自金湯、九郡神策乘無備、諸戎震驚迷所防、五百年來只佳士、迷魂長在白雲鄉、

渡邊林菴

茲徙嚴城疊觸鏡、俱吞四海兩雄心、旌旗影作野花去、原上年々紅白深、

九阜

春霧朦朧日矢紅、可憐孤楫是行宮、須磨浦上烟波裡、吹落梅花一遂風、

内田 貞

一自蒙塵遷玉輿、普天無所寄王居、六軍邊嶮終何事、可恨丞相廟略疎、

日柳燕石

海甸腥風吹翠華、諸盜衰運附長陸、三軍下嶺如飛雨、一族漂波皆落花、笛朽古城鶯續

曲、宮荒寒浦鬼乘車、憑誰爲問水濱事、枯樹無言坐白沙、

片山冲堂

舟過須磨浦、左指鐵柵峰、危壁削千仞、猿猱斷行蹤、憶昔源廷尉、躍馬下層穹、勢如急霆擊、何人敢折衝、叱吒撼山壑、風怒海洶々、走者相蹂躪、進者殲於鋒、一箭盡飛鳥、安復事良弓、茫茫六十州、眇無地容、倚絃長大息、此意有誰同、

源平躑躅

白雲も味方顔成るつゝし哉

戰川乃ち一の谷川の奥を源平つゝし咲わけの谷と傳ふ此谷を一町餘り溯れど二岐にわかれ西の方を赤旗と云ひ東の方は一の谷川の源なり赤旗の土赤色にして源の方と白色なる攝津微書も源平躑躅と一の谷にありと見ゆ

鐵柵山

播州名所巡覽圖會 義經一の谷を落されしより一説に手つがひの峯と云ふ坂落しの手ツガヒなるへし名とせり

今此山を火の山と呼へり義經烽火を擧けたるによると傳ふ

小畑詩山

紅白旗分十萬軍、炎々兵氣裊煙氣、千年人説英勇夢、空作山林一帶雲、

鐘懸松

近年まで鐵柵山の半腹にありし由をれと今と見へす判官鐘松とも云へり

攝津微書 義經一の谷を攻むるの時此地に開る比賣の刻に及へるといふ敵に未夜深く思はさんどて此松に鐘をかけ遠寺の鐘に數たして九つの時を突せしとなり

千種日記 内裡上の山を鐵柵山と云ふ此山の東に尾上鐘掛とて老木あり義經坂落の時鐘を掛玉ふとなり

月かけて我影やはく峰の色

一の谷の上に聳へたる山に於て攝播の堺を爲せり東之高倉山に接し西南に鉢伏山と連れり攝陽群談 俗傳云く鐵柵仙と吐氣現我相仙境を出て暫く此峰に遊歴す因て鐵柵の名あり或は勇壯剛力の樵夫鐵柵を以て山に入數駄の薪を荷ふ時の人彼を號けて鐵柵と稱す

遊方名所略 鐵柵峯在須磨西一里鐵柵峯一名鶉鷓越北是一谷也柵者柱杖名也此峯壁立數仞險阻不可言不鉄杖鉄鎖貫於木石而攀緣難登此峯故名焉是故有鉄掛松

承應四年記 一の谷の上の鉄柵峰に云々此山之火の山とも申鐵柵山とは此山の北の方の山を申との一説あり

千種日記 内裡の上の山を鐵柵山と云ふ須磨名所編案内 舊明石侯世襲の都度此山嶺に登りて烽火を擧げ其合圖を以て領内の各地に烽火を擧ぐりて我領分を一覽せり

承應四年記 一の谷の上の鉄枵峰より九郎判官は鐘掛松あり此松根本より六尺廻延三間餘巽の方へ廣く中古植たる由遊方名所略 鉄枵山原有鉄掛松胡篔簹梅其樹類尖峻也

攝津名所圖會 鐘懸松一谷の半腹にあり近年古松之枯て今は植繼なり古松の株を伐て額板と一前田氏の軒に掲る 蜂の巢に今は手をかきみねの松

鵜飼石齋

義經天性暗通兵、勇畧兼該誰復爭、圮上一編何用學、江都七尺未爲輕、三千逆下鵜山險、十萬悉燒平受情、白骨已成千歲土、生田原上不埋名、

鵜越

鐵枵山北に當る峯嶺き代山を云ふ 攝陽群談 鵜越峠鐵枵峯の半腹北より南より開き出る所也人輒く越る事を不得道狹て大

鳥の羽を慰すと難し是故に鵜越代名あり自是播州三木室山に至る所あり夢野長田兩村の間に本道あり 承應四年記 鵜越の道鐵枵峯に腰北より南へ向ひ出る道あり 東鑑 九郎主相具三浦十郎義連已下勇士自鵜越此山猪鹿狐の外被攻城 攝津名所圖會 鵜越鐵枵嶺の北にあり本道は兵庫より丹生山田郷藍那村を経て播州三木往還也九郎判官殿三草山より筋逢ふ越て一落鉄枵峯に赴けり此道險阻より樵夫も通ひかたし

長梅外

長三州

出人意表使人驚、自古用奇功乃成、夢裡神兵若天降、鵜越一着勝陰平、 鵜嶺之險猶可跋、屋島之濤猶可絕、腰越之驛不可越、十萬平軍一鼓拔、難拔讒豎三寸舌、讒豎之舌有所恃、兄家岳翁如魍魎、獨

怪帷帳張子房、不安劉氏助呂氏、李廣兵法渾是奇、一生數奇亦可悲、芳野風雪衣川水、英雄末路無所歸、多情空得兒女憐、娥眉唱斷纒絲詞、

熊谷扇松

柴山の峯に見ゆる松を云ふ京華要誌云熊谷よは處より扇を以て敦盛を招きたりとの傳説を記せどさにはあらず松の様扇に似たればかくと云へるなり

勢揃代松

柴山の麓にあり義經こゝに兵を揃へしよりこの名ありと傳ふ

古跡塚

二の谷の西三の谷の東あり傳へて但馬守經政城の四郎に伐れたる所ありと云ふ戰の濱とは是より東一の谷の石橋あたりの濱をいふ

り 須磨名所獨案内 經政最後の松保養院の西にあり但馬守經政討れより名付と云ふ

鉢伏山

鐵枵山の西南にあふり尾崎海に出たる峰をいふ 攝津志 壽永中源軍舉烽之處俗傳曰神功皇后埋兜蓋于此 攝陽群談 鉢伏峯須磨村の後三の谷の上にあり所傳に云く昔し神功皇后三韓征討して歸朝の時先づ武庫代濱に至り此山頭に登り給ひ士卒を集む各群參して甲を襍地に伏せ暫く軍功を語り因て以て時の人鉢伏峯と稱す冑の蓋を伏せたるに因れり 承應四年記 火の山の向に當る山を鉢伏山といふ 播州名所巡覽圖會 鉢伏山鉢を伏せたる

似たりよつて名つく

熊谷平山一二ヶ懸

鉢伏山の麓にて三の谷より西の濱をいふ熊谷父子田井畑の古道を経て一の谷波打際に出て一の谷の先陣と名のり平山と魁せし由平家物語に記せるはこの所の事なりと傳ふ

攝陽群談 熊谷平山古戰場須磨村境川等にあり

須磨名所記 熊谷平山一二のかけといふも鹽屋村ふての事なり

所歴日記 平家一れ谷を籠城せし時大手は生田の森搦手は此鹽屋村を限る熊谷平山一二のかけは此處にての事也となん

東鑑 武藏國住人熊谷次郎直實平山武者所季重等卯尅倫廻于一谷之前路自海道觀饒于館際爲源氏先陣之由高聲名謁

林 道春

熊谷平山老名士、聲蹟従前相並馳、一谷觀

攻多斬獲、諸兵逆戰悉披靡、平山未至登還早、熊谷先來進稍遲、千載論功名優劣、在今誰復點鉢鏑、

敦盛塔

三の谷より西へ一町街道は右側にあり

須磨名所記 敦盛の石塔あり高さ一丈一尺土臺四尺四寸あり

攝陽群談 敦盛塔高一丈一尺土方四尺敦盛空顔隣莊大居士と銘す此塔は敦盛靈再來して立之云習り亦熊谷塔に相並て洛東黒谷紫雲山内にあり云々又熊谷平山古戰場の項に須磨村境川等にあり所傳に云直實爰に於て敦盛を討ち取り云々

東鑑 壽永三年二月七日爲義經戰死云々頼義經等之軍中討取る云々首と六條室町に集り十三日八條河原みさらせり云々と見ゆ

攝津微書 鎌倉北條西園寺入道貞時平家一

門の冥福を祈らんか爲に建つ敦盛一人の塔にはあらず攝津名所圖會攝州名所巡覽圖會皆同しと記るせり

平家物語 直實首を包みて大將軍の見參に入れどあり

盛衰記 敦盛の屍骸を父のもとへ直實送り遣し云々

須磨の友 三の谷のあつ先塚を見る俗に此塚をあつもり塚といふ此塚と平家の人々の首をあつ先て熊谷直實主の葬りしより此名ありと云ふ五輪の塔みて半は土且埋もれ昔生茂りていかにもふるく見へたり

本朝俗語志 敦盛の石塔は一の谷二の谷の間海道にあり大きき七八尺はかりの五輪也往來の旅人小石を以て塔を組供る也前後六七町かみち程くたり

千種日記 敦盛爰にて討れ玉ふとなん今年の二月七日と此人れ五百回忌なりとて卒土嬰をたて、石など多く積あけてあり

承應四年記 敦盛の石塔より二町程東に三

の谷又二町程東二の谷又二町程過て一の谷あり山の尾崎より海邊浪打際まで四十間餘あり此所敦盛熊谷戰場あり

遊藝勝記 敦盛の塔の多年を経て半土に埋没す此塔北條家より立たりといふ傳ふ和田の清盛塔と同時の物みや

遊方名所略 自鐵懸松山麓相接有長野此海邊有敦盛石塔

西遊日記 涉源平戰川清川憂玉觀平敦盛碑五輪標而古制也

攝津名所圖會 世俗皆敦盛と稱して往來の旅人追善として石を積塔を建て菩提を吊らひけるも多く見へたり

攝州名所巡覽圖會 俗に敦盛の石塔と云三の谷は間往還にあり半と土に埋れたり谷崩れ磯み落る事かくの如しされは古道は上に有へし又此塔の前を過る人下馬或は鎗を伏せんとし恭敬し禮を爲せり是は何の故ある事を知るへからず此陣所の上は安徳帝の

行宮にてすなわちこれより船も召れたり
若其義か

須磨名所獨案内 今頼政藥師の側にある庚
申塚ともと保養院の地にありて庚申ならて
公子塚あり乃ち敦盛の胸を埋めし所にて六
字の名號は直實の筆ありと見ゆ直井氏の手記
にはもと一
谷の深林にあり平頼政の
碑なりとの所傳を掲ぐ

赤松蘭室

公子青春狐白裘、軍中歌吹自風流、當時玉
笛今寥落、獨有莓苔封古邱、

一休

昔此地有戰場名、流血染殘嫩木櫻、須磨浦
風散花夕、恰如熊谷打敦盛、

林道春

敦盛清容天下跨、子都粧起玉無瑕、風流橫
笛城中曉、力戰交兵海畔沙、一族逃亡自獨
後、二郎來襲道終遷、當時雖死猶生日、往
々寫圖屏上塗、

新宮涼庭

維昔平氏古營壘、經年七百既泯然、當時元
帥無膽略、獨恃嶮嶮鐵柵巔、秋夜月明嘶良
驥、春畫花紅酒如泉、絲管宴休眠未覺、一
炬灰盡滿營煙、東兵如鷲一敵萬、流血十里
山川殫、八歲天子付女子、御幸不須畫龍船、
此時舟中指可掬、一瓢難獲代万錢、白旗逐
北如鷗翼、鐵艦遙通八島邊、西軍誰敢回馬
首、獨有紫羅美少年、沙汀送頭泣敵將、孤
碑留得官道前、又有孝子死于敵、行旅揮淚
停馬鞭、吾今來此吊往事、松樹瑟瑟秋暮天、

頼春水

風光慘澹海之濤、想得當年簫笛音、吾愛平
門相宴樂、不同鎌府閱增心、

草場珮川

玉笛誰圖兆敗軍、梅花零落夜紛紛、平家公
子知多少、今日路人唯吊君、

丹羽花南

一枝湘管又黃昏、腸斷春風浦上村、餘恨于
今消不得、綠波芳草吊王孫、

大沼枕山

公子韶顏避戰埃、城西徙倚宿雲開、暗林風
冷帶餘雪、青葉笛凄吹落梅、畫景轉知逃走
耻、曉空先表別離哀、被呼強敵能回馬、一
笑交刀氣勇哉、

小畑詩山

路傍蕭瑟松竹枝、千年猶見舊苔碑、憐君決
志迎霜刃、下馬無言延頸時、

岡本黃石

寒潮打岸海雲昏、往事千年跡僅存、更有何
人薦蘋藻、路傍古墓是王孫、

何禮之

漠々晴烟淺々沙、踏青兒女過輕韉、無端一
點傷春淚、偷灑王孫墓上多、
一死堂々重鼎彝、夕陽下馬吊殘碑、英魂千
載留苔石、對峙忠臣補子祠、

橋本海關

鐵笛聲高颯戰塵、落花風亂海城春、平軍無
復男兒在、一喝回鞭獨此人、

音と絶ぬ青葉は見えし今年竹 籬 島
や急ぬ火や招く扇の風のまへ 衆 雲
はかまのの名高し須磨の兒櫻

敦盛蕎麥

敦盛塔に前にあり昔と左の歌を歌ひ旅人を呼
ひ留めしとぞ 或る老翁の物語に昔は十五六人の童子
に一文銭或は百文銭な
りて一日の賣上げ金凡一斗五升入の籠
と三籠もあらしと云ふ
そはと敦盛あんばいは義経盛は熊谷は大茶
碗に銀枵やまもり夫を知れ、九郎判官うと
んと色れ白い玉織姫酒は一れ谷源平躑躅は
もろはく熊谷は大盃と一をいれめは顔は辨
慶座敷は千疊敷泉水と帆掛船紀州熊野浦ま
てやりッばなしか茶はせつたい薩摩守さ
れみ喰ひけたら武藏坊辨慶御遠慮れ方は
悪七兵衛草鞋は熊谷はじんばらわらじ破れる
まては受あい
須磨は友 あつ盛蕎麥とて名物のそはあり
いとさたなく見ゆれともこれも旅の興あら

めと立よたれどもこゝにてもものする心地
せねはあふんかきり求てかへり直ち其れ也
を調て試るに粉のふるひあしきにやチャ
リくと砂のさはまて心わろく互ひにわろ
くいひなから思ひの外多くたうへたり

頼 山陽

松際旗亭齋麴香、山當人面古城牆、分明走
狗將薨鬼、誰把殘杯醉九郎、

永松豊山

舞子濱連海水涯、青松如帶列平沙、行人同
吊敦盛墓、蕎麥店開家又家、

橋本海關

大椀銀絲飽客腸、柑皮和處細吹香、箸頭傾
瀉空中瀑、万丈無聲落口長、

泉水井

敦盛塔の上は臺にあり其の跡今に存せり

攝陽群談 敦盛卿山莊古跡一の谷の邊にあ
り土俗傳云太夫敦盛山莊前に山河は流あり

號て泉水の茶屋と稱し其跡今も有り又平常
盛卿第宅古跡同所あり俗傳題する如く今
至て封疆崩れり方九十二間あり

界 川

敦盛塔より西四五町に所に流るゝ小川を云ふ
なり水源は鉢伏山は西の谷より發す攝播兩州
に境にして蝸牛は里の名あるの芭蕉は句によ
れるなり

所歴日記 攝州播州の境川にまはれ攝津國の
方に松あり境に松と云播磨の方に梅あり境
の梅といふ

遊方名所略 此界有相生松大木也播州松有
攝津界攝津松有播州界云々

何 禮之

攝津州接播磨州、一水中分兩界流、樓外千
帆萬帆白、往來半是浪華舟、
蝸牛つのふりわけよ須磨明石 芭蕉

龜井日和

秋里離島は左の如く記せり今は里人もこの奇
談を説くもの絶へてなし

攝西奇遊談 海濱に出敦盛の古墳を拜し、
りけるうち早卒として天は茶いさかはり暴
風雨をましへ且々まつかからす聊茶店れ軒
にやとりをもとめども此茶しきにては行
と能ふまゝと箕の紐とさけるま亭主の曰旅
客さはねどろきまふとさのれこれと龜井日
和なりといふ更其耳あたらしく聞てければ
其くわしきを尋に亭主答へて物語りける家
目井何某と申けるは先祖九郎義經公もまた
かひ平家を誅せし龜井六郎重治か末なるよ
しこれよよつて龜井侯御通行の時はかなら
ず日和くつれて風雨をさそひまつかからす
侯過行玉へとたちまち快晴するとなり故に
雨風を交へ降とも山はれ沖くもりなき時は
龜井日和といひならせざるよし寔に六百餘

年の星霜はむといへとも一念の憤怒わすれ
さることおそろしくも亦奇なり

須磨琴

すま琴はすか琴の轉訛にして須磨に關係あり
スケスガと清元古語より其音調すかすかし
きを以て名つけたる由あれとも巴左の詩文
われは抹殺する忍忍ひす始く採つてこゝに記
せり

須磨の枝折 行平か須磨琴城ひきて人に聞
せたる折によめる歌として汲てこれわかひと
つかのもさらぬにこ いれら所 の心に
かくめるをへ

有 功

心をすませ山の井の水
須磨譜 行平のわくらと云々師頼のはりま
路や云々及ひきみの代云々西行はえら波は
云々兼昌の淡路しま云々

一絃琴一名須磨琴相傳實門行平須磨謫居之日以廂板造之雖正史所不載所由來尚矣云々

茶溪道人

須磨琴一弦十二徽其形象龍日月星辰陰陽五行無不兼備余温其故以新製之通告同好之君子云

一すちに心こめたる琴されど 眞鍋茶齋

千世のまらへもさへしと思ふ

廣瀬青村

操出松風村雨歌、玲瓏一柱小雲和、希音縹緲眞天籟、妙趣元來不在多、

賦庵

緩楓輕權夜向深、一絃能具七絃音、松風村雨仍盈耳、想見當年謫客心、

宮本元球

雉雛牛鳴出古桐、宮商總寄一絃中、誰將別鶴離鸞恨、苦寫孤峰獨樹風、繁簡調分來往失、高低響異操縱功、冥海若后變見、應悔五絃猶未工、

須磨簾

細き竹を搜欄繩にて束ねたるものなりひかし西須磨は家毎みこれをたれたる由にて今もなほ所々に掲ぐ又遊藝勝記云へる柴の垣今も此浦に富貴の家によく見ゆ

攝津名所圖會 西須磨の家毎み常に表の方簾を垂る也土人曰昔一谷の城未だ成さるの前安徳天皇を始め奉り大宮人此須磨に里海士の苦家に入らせ賜ひ暫く行宮と給ふ其時家毎み翠簾をかぎり也其遺風今にありたること

播州名所巡覽圖會 西須磨の家毎にこな常に表に簾をかくるは一此谷内裡の遺風也といふもさるへん事ながら又浦にいにしへの残りるにもあるへんか既み菟原蘆屋の名は蘆の家にして和泉式部か歌にすくもたく浦に苦屋の蘆をたれ空もすくけて降時雨哉とあり此遺風ならば猶おかしく侍らんも

のか

所歴日記 今は萱茨多くたち双てあり

遊藝勝記 巡覽畢て西須磨ある家み簾を揚れと雨歇月清く書島か崎も近々ど見ゆ又山方かけたる家ともの物墓なけあるに柴垣打しは竹の簀垣のふしよくけに見へたるも彼昔の御座所の様思よそへられたり又此浦にては内裏の遺風とて家毎に簾を垂る是を須磨といふ
澄月や影は二重に須磨すたれ

藻塩磯馴味噌

麥麴に少量の豆を加へて製したるもれなり中納言行平卿の始めて製したるもの由にて此地の名物として所々に掲けり始め西須磨の端なる源左衛門と云へる人之を賣れりと云ふ直井元介氏の手記に當時の掛札を寫せり

味噌舊札辻前

串屋關玉堂源左衛門

須磨燒

此里の家々に食しけると云んこは潮にてかほを煎るなり

攝津名所圖會 潮を汲て粥を煎るを潮雜水として此里の農家には今も食したる也
佗ぬれば身にしむをかり甘かりき 風月庵似雲
須磨の麥みそうは雜水

名倉山の土にて製しるものにて六十年前尾州名古屋の人西月なる者此里に來てて須磨寺

攝津名所圖會 名産磯馴味噌麥にて製したる味噌なり近世此里の名物とす

すまの浦わざとも佗て磯馴味噌 籬 島

鍋のちんひら菓子のみかかせ

そまに浦や味ひ辛死磯馴味噌 讀人えらす

海人のえはさもわひしかど覺

汐風や味噌のからびも秋の寂 露 城

潮雜炊

此里の家々に食しけると云んこは潮にてかほを煎るなり

攝津名所圖會 潮を汲て粥を煎るを潮雜水として此里の農家には今も食したる也
佗ぬれば身にしむをかり甘かりき 風月庵似雲
須磨の麥みそうは雜水

須磨燒

名倉山の土にて製しるものにて六十年前尾州名古屋の人西月なる者此里に來てて須磨寺

のあたりは此陶器を賣りし由其の後之中絶せしか近頃保養院前の兒島商店より賣り出せり其の廣告の中且左の如く記るせり
嘗て行平卿の閑居し給ひし時自ら製したる須磨焼と世に行平鍋の稱呼を轟すに至れり然に其後は名のみ残りて久敷製造の中絶し居たるを遺憾と思ひ積年苦辛し漸くにして今般適當の陶土を發見したるに付最も熟練の陶器師を招き廣く諸名家の賢考を求め風雅高尚なる須磨焼を再興し以て行平鍋の縁緒を繼續することゝはせり

吟谷彫

壺長窟吟平氏は彫刻に妙を得たり近頃須磨停車場の前に高標を掲げ此地の名木、松、櫻木等をもてさまざまの器物を製し土地の名産としてこれを鬻ぐ

大師染

紺屋の設けあらざる時の此浦人之須磨寺近傍の谷間より流れ出る金氣水に木綿を浸して種々の染方を爲し着用せりまは大師の功得なるとして時の人大師染と云へり其代後現光寺の分家始めて紺屋を爲せしより此染方絶へたりと傳ふ按するは伊香保名産湯垢染の如きもはなりしならむ
これより須磨以東略記して讀者の便に備へ

聖靈權現

東須磨より天井川を渡りて大手村を行かは程なく街道の左にあり熊野權現を祭る聖靈は熊野證誠權現の誤りとかや例年祭日且降雨あるを以てまよばく權現の名あり

桂尾山勝福寺

聖靈權現の後ろにあり本尊は聖觀音長三尺五寸弘法大師の作なり永延二年證樂上人の建立

あり寶物あまたあり

錫杖 弘法大師の作 十六羅漢 吳道子の筆
阿界曼荼羅 弘法大師の筆 釋尊文殊普賢
漢顏輝の筆 大般若經 唐本清盛寄送 甲冑龍
の王 不知章著

神撫山禪昌寺

勝福寺の北に山に麓にあり本尊聖觀音安阿彌此作といふ延文年間正續大祖禪師は開基あり庭内木扉ありしと今は見へすこは開基和尚唐より移し植へしものゝ由うるの山を神撫山といひしは神功皇后岩の上に座し給ひて巖を撫し且由來すと或は完光和尚まゝに坐禪の時神人來つて頭を撫てしに起因すと云ん境内丹楓多く此且遊ふもれいと多し關谷博士の死せしこ此寺なり
本尊は釋迦か阿彌陀か紅葉哉 飄 水

蓮乃池

聖靈權現より東しせば街道に傍に池ありこれをいふなり重盛は家臣蓮池權頭家綱戦死せし所あるを以てまの名ありとかや建武は戦且足利直義か楠氏に軍兵に追かたれ危き所を薬師寺十郎次郎代爲め且助けられし所も亦ま池に堤なり

越中前司盛俊墓

名倉池の傍にありこはわたりは源平血戦の衝あり盛俊か猪俣則綱に討れたるとは平家物語にも見ゆ
ふんとしも垣紅葉かな男つか

長田神社

雨露も恵み普ねき時みあひて 兼 仲
長田のさどに早なへとるなり
咲匂ふ花のけしきも見らるらに 白 河 院
かみれ心そとらにえらるる
静かなる長田に村に住む人れ 藤原義方

かりけいひいねはこかりな死かな
命たに長田社れなかりせば 爲 頼 卿

かき初ま其かみよりや堪さふん 石出常軒

長田社森みなかき注連繩

上に記せる歌之何れも長田社を讀みたる由は所歴日記攝陽群談拾芥抄遊藝勝記播磨名所巡覽圖會に記るせど獨り名所便覽に長田(出雲)長田なる千本は云々長田里(近江)雨露も云々長田社(伊賀)命たに云々と見ゆ延喜式神祇臨時祭の項を見るに此社も新雨神祭八十五座の中に記しあれと名所便覽は説くは誤りならむ

事代主命を祭る今之官幣小社に列せり

三代實錄 貞觀元年正月授攝津國從五位上勳八等長田神從四位下

日本紀 神功皇后元年事代主尊誨之曰祠吾于御心長田國則以葉山媛之弟長媛令祭和名抄 攝津國八田郡郡長田奈加多

拾芥抄 應和三年七月十五日新雨十一社廣田生田長田

舞子の濱

須磨は浦より界川を西に渡れと播州明石郡東に端なる鹽屋村あり向を西へ二十町とかり行けば舞子停車場設けある垂水村にまで海に向へる社は海神社とて延喜式に載せたる明石郡九座の一なり此村より西へ大凡十町の所より山田村東の邊まで其間東西三十町南北六町餘りの地こそ風光の明媚をもて須磨明石と並ひ稱せらる、舞子に濱にして遙か沖合より眺めれば一帯の清沙と一條松林と遠く相連り近く之を觀れと幾万樹れ老松は枝幹皆な屈曲して跳るか如く舞ふの如く千態万狀極りなく蒼々たる松の縁の階々たる砂子と相映する景色之高砂尾上住れ江と雖とも遠く及はざるは古人に己に云へる所なり風光の妙なる編者は筆の寫し得へくもあらず此地は松露れ名産

にいて七八年前皇后陛下こゝに松露を拾はせ給ひしより其名特高し

兵庫縣地誌歴史考 俗に潮込れ所故廻ひ込みの濱なりと云ふ又清盛童兒を集めて舞を奏せし先し故とも云ひ光源氏行平中納言杯伶人に舞とし先見給ふ故とも云ふ古歌に播磨なる舞子に濱よ乙女らか舞てふ袖れす、しくも見ゆと有

遊藝勝記 雪を敷るやふなる上に翠れ松れ年古く濱風み靡き馴たる枝に手向草打茂つ、村々並立り

攝津名所圖會 前に淡路島横たこり後に小山續き其間に愴然としけり淡路南方は風山間に吹きこゝ梢の空を吹き後の山の峰を吹き越え程よく生育の理を得る事もや浦風に靡くひ先松たをや先の 税所敦子 うちかへしまふ袖かどととる 自から舞子の濱の松か枝は 何多仁子 ねとるすかたにみえにける哉

ほりま路と花より松のやまひかな 露 城

亂松相映白沙明、隔水青山對晚晴、鷗背無風細波靜、遠帆如坐近帆行、 頼 山 陽

青松一帶映行人、赤石灣東舞子津、說叟亡來無好句、鷗聲帆影管殘春、 菅 茶 山

千帆不動風全死、玉鐘修眉是淡州、夾路青松三十里、夕陽人倚酒家樓、 金本 摩 齋

暮潮拍岸夕陽暈、對坐樓頭把醉時、隔水青山如有釣、依然春影落吟巖、 竹本 晚 香

碧紗誰護壁間詩、重上津樓憶舊時、隔水青山如有意、依然春影落吟巖、 福原 周 峯

鷗背揚々帆影孤、濃雲低水午陰鋪、遠風吹送電籠窟、隔海泉山淡如無、 梅 磧

葛岡香

雪白連邊是明石、烟青橫處即須磨、箇間無限好風景、却恨輕帆艸々過、

小畑詩山

松嵐一里卷砂清、更引濤聲弄鼓笙、借問佳人何處去、彩雲如袖影空輕、

淵上旭江

斌媚多佳景、松抄夕霞曛、仙姬應舞散、衣桁桂榴裙、

何禮之

舞子濱邊春草芳、幾家兒女踏青忙、輕籃短袂纖々手、笑拾沙中松露香、

源季融

播洋十八里、波面渺無涯、淡島半籠霧、征帆多買船、矮屋總漁家、官道行人影、鞋痕印地斜、

永松豐山

一帶行松碧鬱葱、畫樓相映水烟中、風光明媚美人似、舞妓濱名果不空、

明石

明石浦明石瀉明石海明石灘明石濱或は明石迫門泊里驛の名あり赤石の字真かりと云ふ（和名抄延喜式播磨風土記及び日本紀の奇談等は省略して記せず）彼の月山は此浦は眺望第一の地にして東は畿内紀伊芳野金剛山或は生駒雲に聳へ西は四國の島々基布して南淡路につゞきて大和島れのよろ島他にまされり齋松平侯八万石は城下にまわれは其繁榮言も更なり特に柿本人麿の祠ありて四方に遊客こゝみ杖を留光さるものなし扶桑名勝詩集の明石八景は仙蹤朝霧大倉暮雨藤江風帆清水夕陽印南鹿鳴尾上鯨音繪島晴雪赤石浦月と記せり詠歌作詩いと多し

傳乃く赤石の浦の朝きりに

島かくれゆくふねねーそれもふ

西遊日記 傳のく乃歌はまふと小野篁

かよきたるにて今昔物語又の篁は家れ

歌集にも明乃せたりこれは古今集に或

人か人丸の歌なりといへりと書せまより

誤り傳へける

見渡せば赤石のうらに焚る火の 門部 王

傳にそ出ぬる妹かこふらし

今ぞ知る秋は南にくるかりの 讀人まらす

明石のおかの月になくとは

あかし瀉あまの苦屋の烟も 順徳院

まはしそくもるあきの夜のつき

月さゆる明石の迫門に風吹と 西行

氷けうへにたゝむまらなみ

夜とにも明石の浦の松原と 爲憲

なみをこそこのみよるとしるらめ

かひなくて明石の海の秋風に 中務

こひし死なみを立さわだる

夜を込し明石のせと漕出れと 俊恵

遙におくるさをしかのこゑ

眺めやる心の果をかかりける 同

あかしの沖にすめるつきかけ

燈火乃あかしの灘に入日にや 人丸

漕わかれせん家のあたりみゆ

ふた壁ときかすはいてし時鳥 公通

いく夜あかしのとまりありとも

伝くくと思ひ明石の浦千鳥 公經

あみのまくらになくくこさく

慈照院自歌合

釣舟そおのか浦く歸るなる

明石も須磨もくるくちみ路に

浦風にあかしのとなみ霧晴て 豊原統秋

たくもの煙あわれにそたつ

淡路瀉かみみて歸る雁かねも 左大臣良經

ままかくれゆくはるのあけぼの

淡路瀉傾くはきはのくくと 細川左京大夫

あかしのうらをいするとも舟

舟とひる明石月の有あけみ 俊成

うらよりみちのさほ鹿のこゑ

明石瀉色なきひとの袖を見よ 藤原秀能

そゝろにつきとやどるも代かは

徒に幾夜あかしれうらなみみ 家衡

攪くむ蚕の獨ぬるらむ
 明石瀉浦よりをちの離れ石の 知家
 ひとりもさみに幾夜ぬれなむ
 明石瀉こよひは月も満しはの 行能
 ひるにかはきは哀れなりけり
 曇りなき明石は浦のなひにも 頼氏
 あきの今宵の月はみて客り
 あかし瀉名ふかふ浦に澄月も 隆祐
 猶のよまける影をみるかき
 掛りける秋の今宵の月上まや 爲家
 浦を明石の名にさためけん
 あかし瀉昔一の跡を尋ね来り 同
 今宵も月にそてぬらしつゝ
 明石より繪島を掛て霞めとも 俊成
 かすみの上も沖はしらさみ
 霧の間は明石のせとに入見 清輔朝臣
 うらみ松風をどにいらしむ
 にほ船はまかちしけぬき急く也 法性寺入道
 明石の月に鑑りおろはな

明石瀉千鳥しはなく今よりや 圓昭法師
 おきつ汐かせさむく吹らん
 明渡る明石のとより見渡せば 爲家
 うら路の霧に島かくれは
 宗貞親王千首
 明石かた浦路は月に問なれつ
 しまひもかしきおかのいゑかな
 まどろまで涙枕ふ明石かた 源三位
 暹瀨くまなき月をみるかき
 正治二年百首
 月清きあかしの瀬戸の波は上
 うらみをのこはあり明のくも
 同
 あかし瀉浦ふく風に雲はれて
 同
 明石瀉月故ならぬ眺めまて
 はれてさひしき波はうへかな
 爲忠首
 雲拂ふ秋の夜かせに月はれて
 あかしのうらに海士と釣する
 同
 とさらそ明石の浦へ思ふと
 眺にもかむいさよひれつさ
 あかし瀉島たちかくは朝霧ふ 道助法親王

舟こそ見へね千鳥鳴かり
 最勝四天王院障子和歌
 袖ぬれて幾よあかしの浦風に
 おもふかこよまつきも出らん
 同
 秋の夜の月へ曇る浦の名を
 雲にあかしのつけて過ぬる
 同
 あかし瀉浪よりかちに雲晴て
 すむらん月のとてをまらはや
 同
 まらぬよの雲井の外秋迄も
 あかしの波に光る夜は月
 同
 あきの夜の月をあかしの苦ひさし
 久しくかきて見つる月哉
 同
 明石瀉いさかちこちも白露の
 おかへの里の浪の泣きかけ
 同
 明石瀉うらみぬ袖も月や宿る
 ねなまし海士のもしは涙つゝ
 同
 明石かた月は浪路の果もなし
 あきをかさりの有明は空
 同
 隈もさく澄へさよよは友なれや
 あらしの涙にうつる月影

同
 明石かた雲をへたてゝ行船の
 待らん月にあきかせと吹
 ほとさす待こゝろしれ明石かた 石出常軒
 島かくれゆく泣きをねしみて
 あかし瀉曙えろきなみの上に 同
 わらこれいつるあはままやま
 名にしあふ明石の海にか霞む 磯部元實
 月や宿らん淡路しまやま
 暹夜に明石は海城見わたせと 永田真文
 泣きほ美ふねのさみにたよふ
 手ぬうては木魂に明る夏は月 芭蕉
 蛸はやはかき夢を夏の月 同
 林 春常
 月晴赤石浦邊秋、上下明々一色後、万里蒼
 波風不起、白雲如洗水晶樓、
 赤石浦晴月滿舟、無双光景競清遊、雲霞倒
 影層波底、蟾窟鱗官一色秋、
 頼山陽
 歌神祠外起朝烟、舞妓酒頭酒如泉、借問行

人有何急、欲乘兵庫一番船、

菅 茶山

國司舊府定何邊、赤石新城万户煙、曾是真龍潛匿地、酒間歌舞憶當年、

入見友元

一輪洗出一江晴、浦邊秋不負佳名、清光千里明如畫、白玉樓高赤石城、

北條霞亭

渚館迎舟何處雜、廣陵彈盡月夜思、長安不見浮雲外、白馬金鞍想玉姿、

秋 玉山

潮生赤石欲黃昏、乘月扁舟下海門、回首汀洲芳草遍、不知何處吊王孫、

釋 五岳

鷗聲帆影各流形、赤石春光與物靈、君聽開年最初句、淡山隔水數峰青、

服 天 游

紅亭綠酒暫相留、美爾揚帆赤石遊、試見煙波朝霧裏、依微島樹隱行舟、

松浦大鏡

海面消借烟曉風、漁舟出浦破青銅、歌仙不

小畑詩山

會今 興、島外鯨波浴日紅、

淵上旭江

風破海雲紫落暉、立沙鷗鷺忽然飛、偃松松岸松聲起、肩網漁翁踏浪歸、

人丸神社

赤石城に續ける東に丘陵人丸山にあり人磨は官位高き人にあらざるも持統天武の御門に仕へ奉り日並知新田高市の三皇子などにも知られ長歌に巧な花を愛て月をあはれみ昔を思ひやり今をよるこむよめる歌い多し里諺に此社を安産火災の神といへるは人丸は人生るまた火止るに通ひての事にて平家物語に古之岐を腰氣に通とし飯とけるに同じきもの

八房梅

社の西月照寺の庭に船形の老梅樹あり此を云ふなりむかし赤穂の義士間瀬久太夫手つから植へしものにて湖紅の花を開き八房の實を結ふとぞ

林 羅山

此外に筆柿雲井櫻などありて何れも奇しき物語あり盲杖櫻の花漬八つ房の梅漬はのく糖などの名物所々の茶店に見ゆ

此地遺蹤柿本仙、聞吟殘夜欲明天、浦邊望入霧中去、傍島移過無數船、

草場佩川

問起歌林柿太夫、紛々朝霧海之隅、氛氳一氣未全曙、遙指前洲辨有無、

齋藤拙堂

水輪當夏影將圓、赤石城邊夜泊天、明發相思終不寐、烟波何處吊歌仙、

なれ

我峰集 未知何世何人之所建祠在城内近世移於郭外云々在時奏神樂於城内舊跡云播州名所巡覽圖會 元和年間小笠原右近太輔明石城を築きし時今の城地より移せるものみして始めより此祭祭れるにあらず軍記などに人丸塚の戦ひとあるせしは今の城地の事なり石州高角山にも社あり享保八年一千年忌に當り石播の兩社へ正一位を賜れ禁裏仙洞の兩御所よりも法樂は御制ありとの事を記るせり

盲杖櫻

舊城内より移せるものとして社前にあり所傳に免紫の盲人詣てやけくど誠あかしの神ならば我にも見せよ人丸の塚と詠せしに両眼忽ち開けて明かに物見るとを得しかは今は用なしとて携へたる櫻の杖を地上に植へ去りまか枝葉生ひ出て依てこの名ありと云ふ

西同一想、歌仙何肯讓詩仙、

入見友元

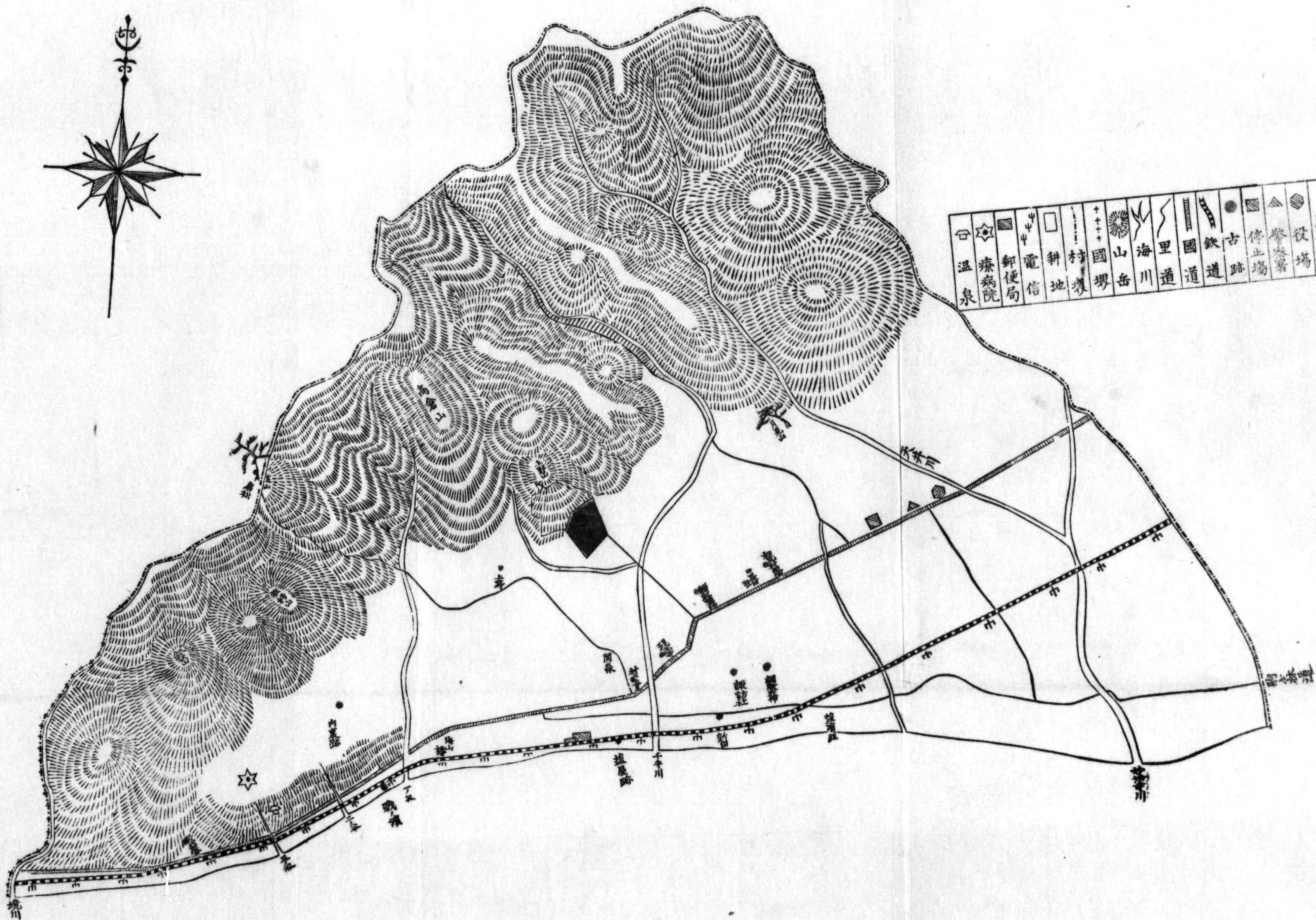
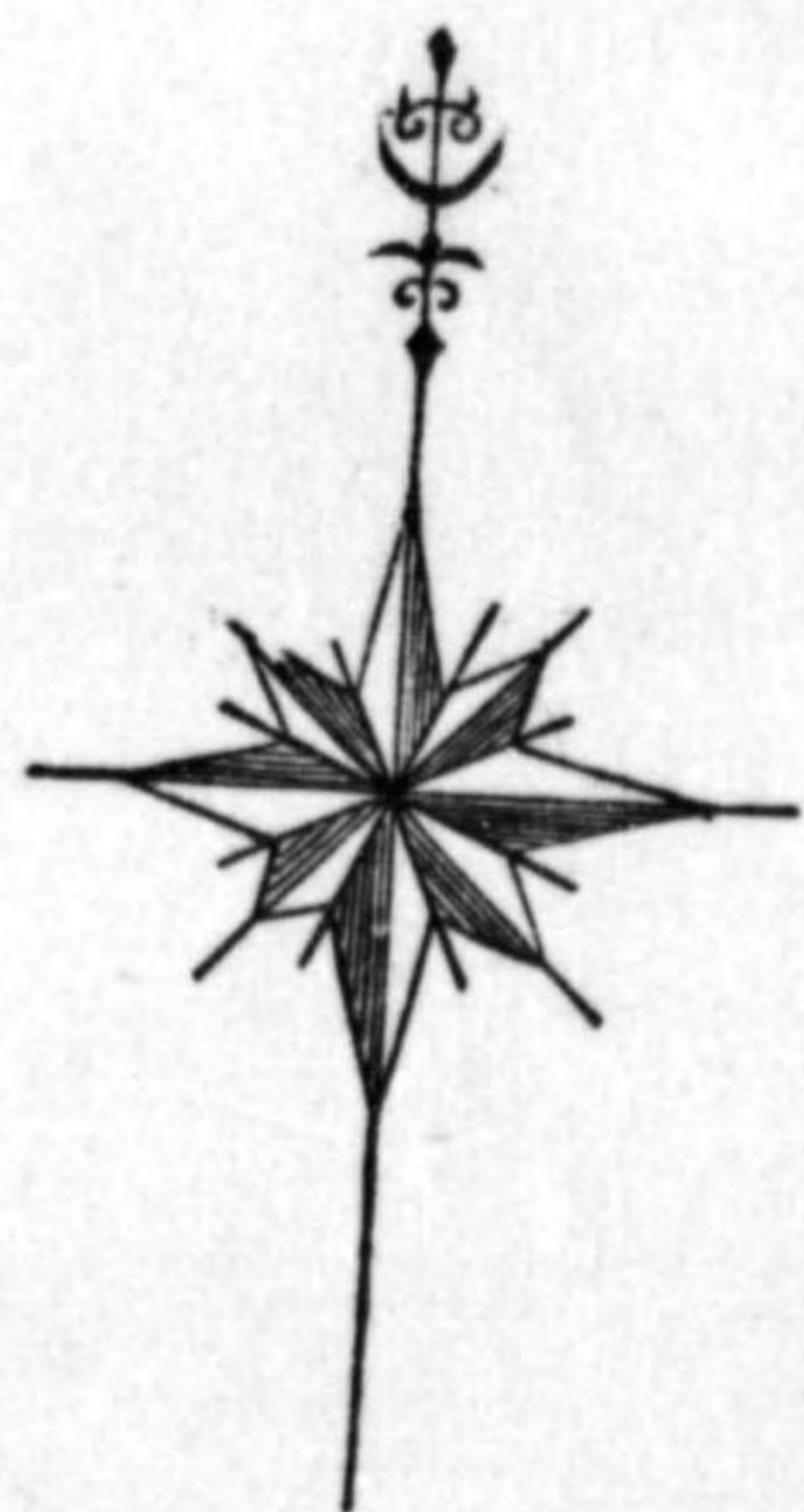
東方既自大江天、香霧霏々接水烟、雲島風帆看不見、浦頭何處問歌仙、

藤田吳江

歌仙一去二千年、祠廟尙存松樹間、沙鳥一聲天欲白、孤帆影落霧中山、

須磨誌畢





明治廿九年七月
同 年 月

日印刷
日發行

〔定價金貳拾錢〕

香川縣香川郡安原村大字安原下
三百拾番戶
編纂兼發行者

上原勇太

香川縣高松市大字濱町百貳番戶

印刷者 新居政七

兵庫縣武庫郡西須磨村

直井元介

兒嶋宗次郎

志賀藤吉

林 八良左衛門

成瀬 猶喜

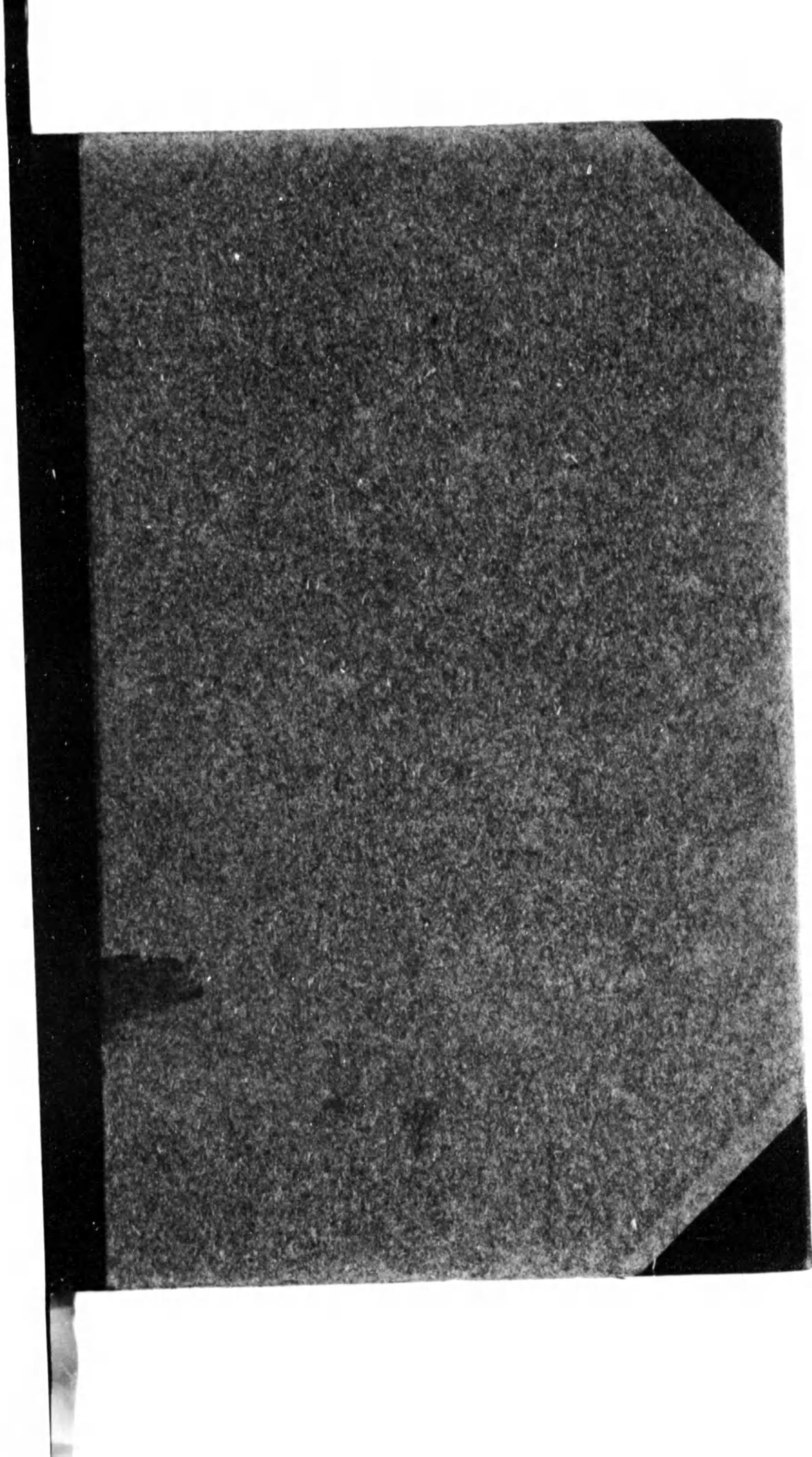
神戶驛內

永樂店

賣 捌 所

15
2/5

15
215



15
215

025505-000-7

15-215

須磨誌

上原 勇太 / 編

M29

ADC-2970



